

寛弘寺 1 号墳

2001年3月

大阪府教育委員会

巻頭カラー1図版1 寛弘寺一号墳墳丘基底面上の炭灰盛土

南より



西半部



東半部



巻頭カラー図版2
墳丘盛土断面

西より



西より



北東より



東より



南より



は し が き

金剛・葛城山脈の西麓、千早川と宇奈田川の丘陵上に立地する寛弘寺遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡として古くから知られています。しかし、昭和55年にこの丘陵に「河南西部地区農地開発事業」計画が持ち上がり、同58年からは国の認可を受けて府宮事業として進められることになりました。これに伴い、本府教育委員会は昭和57年度より遺跡の分布調査および試掘調査を行い、それに基づいて過去15年以上にわたり発掘調査を実施してきました。これら一連の調査によって、埋蔵文化財の内容がより具体的に把握され、縄文時代以来、この丘陵がどのように土地利用されてきたか、その変遷を鮮明にたどることができるようになりました。

今回報告する寛弘寺1号墳は、丘陵の北東端に営まれた5世紀の古墳で、これまで明らかにされてきた石川流域古墳群の中の前期古墳から終末期古墳に及ぶ造墓の変遷と、それを営んだ在地の古代豪族の歴史の解明に新たな資料を加えるものです。また墳丘を築く際、炭灰を伴って土を盛り上げる事例は、古墳築成の技法面で興味深いデータを提供したといえます。

本調査は、関係機関、地元の方々のご理解とご協力によって実施することができました。今後とも、本府文化財保護行政により一層のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、平成11年度および12年度に実施した大阪府南河内郡河南町寛弘寺地内所在の寛弘寺1号墳の府宮河南西部地区農地開発事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課が、調査第1係技師地村邦夫（平成11年度）、調査第2グループ主任技師橋本哲（平成12年度）を担当者として実施した。事業は、平成11年度は平成12年2月1日に着手し、同年3月31日に終了し、平成12年度は平成12年6月に着手し、13年3月30日に終了した。
3. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
4. 今回の調査で出土した鉄製品の保存処理については、（財）元興寺文化財研究所に委託した。
5. 本書の執筆は地村、橋本、山田隆一、進藤智美（調査補助員）が行った。執筆の分担は、各章節の末尾に添え書きた。
6. 発掘調査、遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額大阪府環境農林水産部が負担した。

目 次

はしがき・例言

第1章 調査に至る経過

第2章 調査区の現状と調査の方法

第1節 調査区の現状

第2節 調査の方法

第3章 調査の結果

第1節 基本順序

第2節 墳丘部の調査

第3節 主体部の調査

第4節 墳丘盛土の調査

第4章 出土遺物の観察

第5章 寛弘寺1号墳の墳丘の構築

第6章 まとめ

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図

第2図 調査区位置図

第3図 寛弘寺1号墳墳丘平面図

第4図 寛弘寺1号墳墳丘断面図

第5図 寛弘寺1号墳主体部全体平面・断面図

第6図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土状況位置図

第7図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土状況細部(1)

第8図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土状況細部(2)

第9図 墳丘盛土基底面上の炭灰混じりブロック平面図

第10図 寛弘寺1号墳墳丘盛上下の検出遺構(1)

第11図 寛弘寺1号墳墳丘盛上下の検出遺構(2)

第12図 寛弘寺1号墳出土鉄製品実測図(1)

第13図 寛弘寺1号墳出土鉄製品実測図(2)

第14図 寛弘寺1号墳出土鉄製品実測図(3)

第15図 寛弘寺1号墳出土鉄製品実測図(4)

第16図 墳丘盛土基底面上炭灰混じりブロックの平面形状模式図

第17図 鉄製品出土位置図模式図

表1 墳丘盛土基底面上炭灰混じりブロックの平面規模の分布

表2 整地作業の観察される古墳一覧表

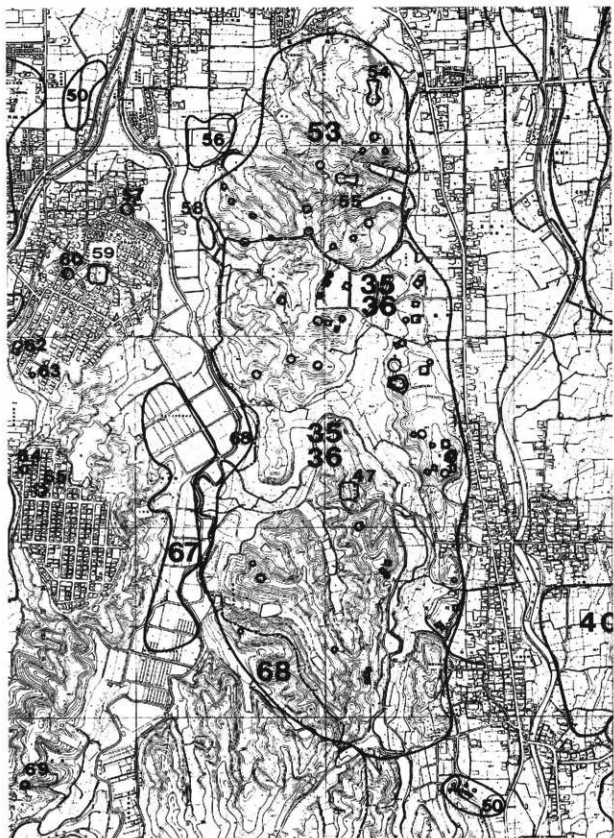
第1章 調査に至る経過

河南町西部の、千早川と宇奈田川に挟まれた標高90m～100mの丘陵上に古墳群が存在することは、早く昭和9年に京都大学の梅原末治博士によって初めて学界に報告されている(第1図)。このときは今回の調査対象となった寛弘寺1号墳を含むツギノ木山支群の5号墳が調査され、墳丘の直径は約30mで、二重の円筒埴輪列が設けられ、下段の埴輪列の西側前面に「コ」の字形埴輪列の突出部があるという結果が得られた。その後、森浩一氏をはじめとして5号墳とその周辺で舟形埴輪、鉄製甲冑片などが採集された。これらの情報からこの支群には中期から後期にかけての古墳が営まれたことが判明していたが、それ以上の知見は得られなかった。

しかしその古墳群の内容や性格が徐々に明らかにされ、古墳群ばかりでなく、この丘陵一帯が縄文時代から中世・近世におよぶ一大複合遺跡として認識され始めたのは、昭和50年代半ばに始まる農用地造成工事に先だって実施された本府教育委員会による一連の発掘調査によってであった。

その発端となったのは、昭和55年に河南西部地区土地所有者が土地改良法に基づき、この地域の農地造成の申請を河南町を経由して大阪府へ提出したことであった。この要望が本府の農業振興施策と合致するところとなり、翌、56年には早くも基本設計が実施され、国の認可を得た。そして昭和58年度より府営事業として本格的に実施する方向へ進んだ。これに伴い本府教育委員会は、対象地域に「周知の遺跡」寛弘寺古墳群の取り扱いについて河南町と協議を重ね、まず遺跡の分布調査を行うことで合意をみた。造成計画は全面的に尾根を削り谷を埋め、広大な耕作地を確保し整備するので、尾根上の古墳全てを保存すると、土量が全く不足するとともに耕作面が減少してしまい、これは土地改良法に合致しない。したがって尾根を削る計画を変更することは計画そのものの中止を意味した。しかし地元住民の強い要望があり、そのうえ国の認可を受けていた経緯から、結局、計画を白紙に戻すのは困難との結論に至った。

以上の経過を経て、昭和57年5月、大阪府農林部耕地課の依頼を受け、当該部分の分布調査を実施したところ、当初の予想を上回る古墳、遺物の散布箇所を確認した。これらの知見に基づいて翌58年11月25日から59年3月31日まで、対象地北端の農地モデル地区の全面発掘と、現水田の散布地に対するトレンチ調査、さらに古墳以外の尾根部についてもトレンチ調査を実施した。こうして以後、毎年数千㎡の規模で発掘調査が実施され、試掘で確認された範囲98万㎡のうち実際の調査面積は13万2千㎡であった。これまで弥生時代の竪穴住居跡百数十棟、古墳時代前期から終末期に至る古墳92基、さらに火葬墓、木棺墓、土器棺墓、落とし穴などが発見され、その時期は縄文時代から江戸時代にまで及んでおり、いずれも南河内の地域史を日本史全体の中に位置づけることのできる貴重な遺跡・遺物であることは何人も否定できない。ただ一部の古墳が移築保存され、調査された古墳をはじめとする遺構の大半は記録保存という形にとどまらざるを得なかつ



35 寛弘寺古墳群、36 寛弘寺遺跡、40 神山遺跡、47〔府指〕有文 寛弘寺神山墓地石造五輪塔、50 神山丑神遺跡、53 西大寺山遺跡、54 西大寺山北古墳、55 山(かがりやま)城跡、56 山中田北遺跡、57 板持丸山古墳、58 平木遺跡、59〔重美〕石造十三重塔、60 板持4号墳、62 板持古墳、63 板持1号墳、64 板持2号墳、65 板持3号墳、67 尾平遺跡、69 中佐備案跡

第1図 周辺遺跡分布図(『大阪府文化財分布図』2001年3月版に拠る)

たことは、この遺跡の重要度からみても惜まれる。

今回の調査対象となった寛弘寺1号墳は、墳丘を明確にもつ西尾根の支群（ツギノ木支群・1～7号墳）としてすでに周知され、地元でも古くから「寛弘寺の七ツ墓」と呼ばれて、保存する方向で考慮されてきた古墳群のひとつであった。そのため昭和60年度の調査ではこの支群の現況測量図を作成し、また昭和62年には1～7号墳裾部の四方にトレンチを設定し墳丘の範囲が確認され、そのデータは農林部耕地課との協議の際に保存措置を協議する拠り所となってきた。しかし上記した農地造成の計画に伴う一連の削平工事によって記録保存を取らざるを得ない経緯をたどり、今回報告する調査に至ったわけである。

尚、現地調査にあたっては、財大阪府文化財調査研究センターの江浦洋技師より種々御教示いただいた。記して感謝申し上げます。（根本）

（参考文献）

- 『寛弘寺古墳群発掘調査概要』Ⅰ～Ⅺ、大阪府教育委員会、1983～1992年
『寛弘寺遺跡発掘調査概要』Ⅻ～ⅩⅤ、大阪府教育委員会、1993～1996年

第2章 調査区の現状と調査の方法

第1節 調査区の現状

今回調査を行った寛弘寺1号墳は、「ツギノキ山」と呼ばれる南北方向にのびる丘陵上に築造されている。この丘陵は、寛弘寺古墳群が築造されている主要な三つの丘陵のうち最も東に位置することから東部丘陵と呼ばれている。古墳の密度は三丘陵の中で東部丘陵が最も高い(第2図)。

寛弘寺古墳群では既往の調査で92基の古墳が確認されている。このうち北部丘陵は16基の古墳が確認されているが、時期の判明しているものは前期および後期古墳が主であり、中期古墳は1基しか確認されていない。一方、南部丘陵では13基の古墳が確認されているが、これまで前期および中期の古墳は確認されておらず、後期から古墳の築造が開始されると考えられている。これに対し、東部丘陵では全体の約7割にあたる63基が集中している。また東部丘陵では前期から終末期まで、連続と古墳が築かれているのも特徴である。全体的な傾向としては前期から中期前半までの古墳は丘陵北部に集中し、丘陵南部には認められない。一方、後期後半から終末期の古墳の分布は丘陵南部に偏っている。

この東部丘陵では、すでにほとんどのエリアで調査が完了している。現在までに農地開発事業に伴う造成工事が大規模に進められ、旧来の景観はほぼ失われたと見てよい。調査前の段階では、これまで保存対象とされてきた本墳と本墳の南方にある4～7号墳の5基だけが造成地内に島のように残っている状況であった。

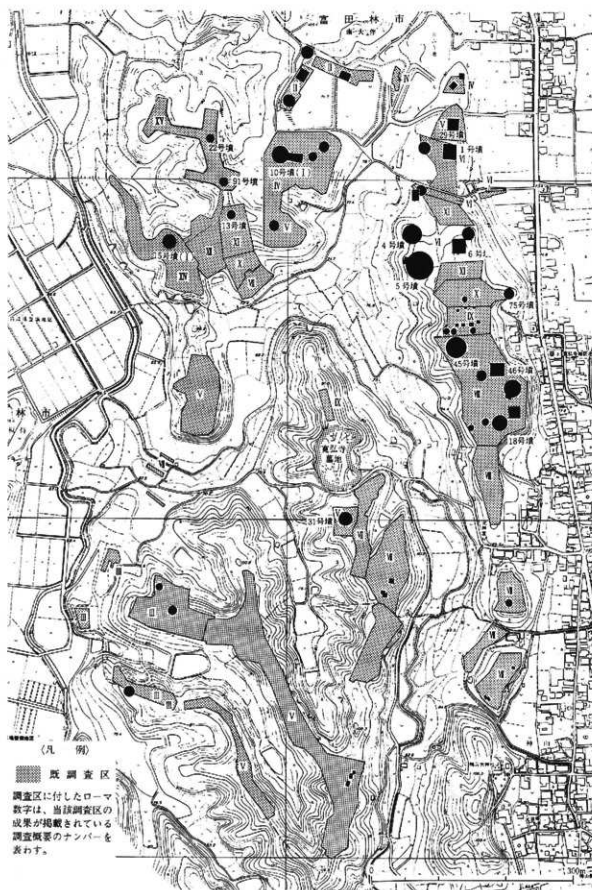
本墳の周囲もすでに調査が完了している。本墳の北側は昭和61年度に調査が実施された。4世紀中葉に位置づけられる29号墳と5世紀末に位置づけられる木棺直葬墓2基等が検出された。29号墳は寛弘寺古墳群の中でも最も古い段階の古墳の一つである。また下層からは縄文時代の土坑群も検出されている。一方、西側と南側は平成5年度に調査が実施され、5世紀中頃～後半の90号墳、6世紀後半～末の35号墳と89号墳の計3基の古墳が検出された他、7世紀代の建物群が検出されている。これらの調査後、本墳を残して周辺は大規模に造成された。

第2節 調査の方法

1) 調査区の設定と調査方法

このような開発の中で残されてきたのが今回の調査範囲である。南北33～37m、東西25～30mで、面積は約950㎡である。ただ、調査開始直後、機械掘削によって表土を剥いだ所、調査区北部の一部が、先述の昭和61年度調査区と重複して設定されていたことが判明したため、実質的な調査面積は885㎡となった。

調査にあたっては表土を重機で掘削し、以下を人力で掘削した。また随時、国土座標に基づいた測量を行うとともに、墳丘と主体部の全容が明らかになった段階で、ヘリコプターによる航空写真測量を実施した。



第2図 調査区位置図 (本年度は1号墳が調査対象)

2) 地区割り

大阪府教育委員会では(財)大阪文化財センター(現:(財)大阪府文化財調査研究センター)の地区割りに依拠した共通の地区割りを採用している((財)大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988年)。

本地区割りは国土座標第6系に基づいており、6段階の区画からなっているが、各遺跡によって必要とする地区割りの精度が異なることから、4段階の区画までは全ての調査で実施し、必要に応じてそれ以上細かい地区割りを行うこととしている。

第1区画は大阪府が設定している1万分の1の地形図を使用したもので、縦6km、横8kmの区画である。南西隅を起点として、縦軸をA~O、横軸を0~8とする。

第2区画は第1区画を16等分した縦1.5km、横2kmの区画であり、2500分の1の地形図1枚の範囲である。南西隅の区画を1として東に進み、北東隅の区画を16とする。

第3区画は第2区画を100m単位で区切り、縦15、横20の区画としたものである。本区画は北東隅の区画を起点とし、横軸を1~20、縦軸をA~Oとする。

第4区画は第3区画を10m単位で区切り、縦10、横10の区画としたものである。北東隅の区画を起点とし、横軸を1~10、縦軸をa~jとする。

マニュアルには第5・6区画もあるが、今回の調査では設定していない。

今回の調査では、この共通区画を測量や遺物を取り上げる際の基準としているが、主体部内の副葬品の取り上げ、および墓墳掘り方内の遺物の取り上げについては主体部の主軸に合わせた区画を別に設定した上で取り上げている。これは主体部の南北方向の中心ラインを設定し、1mメッシュに区切ったものである。主体部の主軸が南北方向から20°近く西に振っているため、便宜的な措置として設定した。調査完了後、遺物ラベル・台帳には共通の地区割りによる区画を併記している。

3) 土色

本調査では土色の表示は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』1994年に基づいている。なお隣り合う土層が同色でしか表現出来ない場合は、微妙な色調の違い、土のしまり具合、含まれる砂粒の大小、粘性等を本文中で注記する。(地村)

第3章 調査の結果

第1節 基本層序

主体部調査終了後、墳丘構築状況を観察するために墳丘の中心から東西・南北に直行する断ち割りトレンチを設定した。その結果、大きく分けて以下の4つの土層群に分けられることが分かった(第3図)。

第I群 TP89.200付近から現地表までの盛土(第2~43層)は7.5YR6/2灰オリーブ色土混じりの5YR5/6~5/8の明褐色もしくは明赤褐色の砂質土が主体となっている。この明褐色土もしくは明赤褐色土は第IV群の地山(第58層)と同質の土で地山の土が盛土として利用されていると言える。また灰オリーブ色土は第III群で後述する火を受け変色した旧表土である5Y5/2灰オリーブ色土(第56層)と同質と思われる、この土の含まれる量により土層断面に差違が生じ、墳丘構築の工程が想定できる。この灰オリーブ色土は全体的に疎らに、または1.0~5.0cmほどの塊として含まれている。

第II群 炭層(第54・55層)を含む一辺30~50cm・厚さ10~20cm程度のブロック状のもの(第44~53層)で、基本的には前述した第I群に含まれる灰オリーブ色土や後述する第III群の第56・57層と同質の土である。強く火を受けたところとあまり火の影響を受けなかったところの差がこの土色の差として表れたようである。また、このブロックは第I群で述べた盛土中にも含まれる。さらに、墳丘北側で最終的に4つの石を検出した。これらの石は特別に掘り込まれて置かれた様子はなく、炭層がこれらの表面にも見られ、被火していることから野焼き当時この場所にあったものと考えられる。

第III群 第II群の一連のブロックと第IV群の地山の間にある層(第56・57層)である。第56層は第57層と同質であるが前述したように火を受けた差によるもので、特に第56層は本来火を受け変色したもののブロックとして積まれることなく、そのまま残ったものと捉えることが出来る。

第IV群 7.5YR5/6の明褐色の土で地山である(第58層)。

以上の断面観察から、現表上を除く墳丘盛土は、主に灰オリーブ色土混じりの褐色系砂質土から成り、厚さは最大で約1.3mを測る。墳丘基底部には炭灰を含む一単位一辺30~50cm・厚さ10~20cm程度のブロック状のものが積まれている。この炭灰から明らかに野焼きしたことがうかがえる。この点については第1章で墳丘築造と合わせて考察することとする。

第57層から僅かではあるがサヌカイト片が出土し、地山上面で検出された土坑の一部からもサヌカイト片が出土している(本章第4節2参照)。寛弘寺古墳群のこれまでの一連の調査の中で認められた縄文時代の包含層の存在と考え合わせて、この層を同時代のものとできよう。

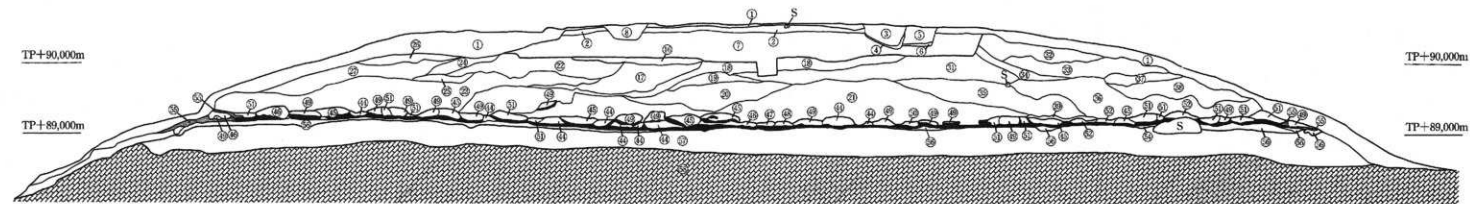
(進藤)

第2節 墳丘部の調査

1) 墳丘の外形と規模

S

N



- ① 黄表土
 ② 赤褐色 (5YR 4/6) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-2mmの砂粒多く含む。
 ③ におい黄褐色 (10YR 5/5) 砂質土、しまり不良、砂粒の粗多含む(塊状)。
 ④ 赤褐色 (5YR 3/2) 砂質土、しまり不良、炭化物を多く含む(塊状)。
 ⑤ 赤褐色 (2.5Y 4/6) 砂質土、③と異なるがやや赤味強い(塊状)。
 ⑥ 暗赤褐色 (5YR 3/2) 砂質土、炭化物多く含む、①と異なるがやや明るい(塊状)。
 ⑦ におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土、しまり良、多量の炭化物を含む(塊状)。
 ⑧ におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土、しまり良、 ϕ 1mm程度の砂粒多く含む。

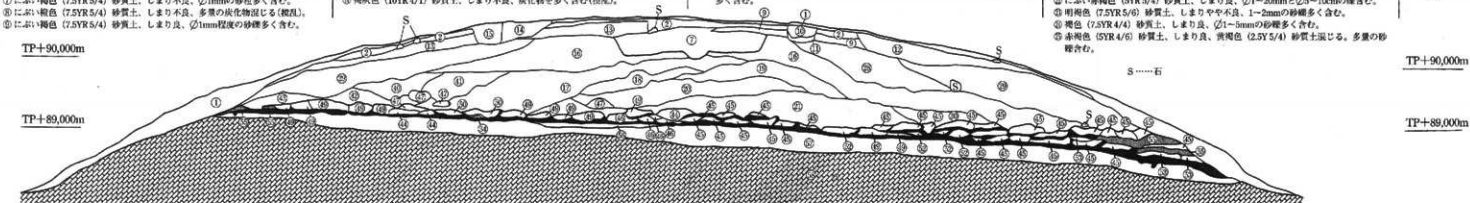
- ⑨ におい褐色 (7.5YR 6/4) 砂質土、しまり不良、陶灰色 (7.5YR 4/1) (炭化物類)が多く混じる(塊状)。
 ⑩ 明赤褐色 (2.5YR 5/6) 砂質土、しまりやや不良、灰ネオリーブ色 (10Y 6/2) (少量の炭化物を含む)混じる(塊状)。
 ⑪ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-5mmの砂粒及び ϕ 20-30mmの礫を含む。
 ⑫ 褐色 (7.5YR 4/6) 砂質土、しまり不良、 ϕ 1mm以下の砂多く含む。
 ⑬ 陶灰色 (10YR 4/1) 砂質土、しまり不良、炭化物を多く含む(塊状)。

- ⑭ 暗褐色 (10YR 3/1) 砂質土、しまり不良、炭化物を多く含む(塊状)。
 ⑮ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土の混入土、 ϕ 5mm以下の砂粒を含む。しまり良。
 ⑯ 明褐色 (5YR 5/6) 砂質土、しまり良、 ϕ 5mm以下の砂粒を含む。灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土混じる。
 ⑰ 灰褐色 (7.5YR 5/3) 砂質土、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土混じる。 ϕ 1mmの砂多く含む。

- ⑱ 明褐色 (5YR 5/6) 砂質土、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土混じる。 ϕ 1mm以下の砂粒多く含む。
 ⑲ 明褐色 (5YR 5/6) 砂質土、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土混じる。⑳と異なるがやや黄褐色(塊状)。
 ㉑ 明褐色 (5YR 5/6) 砂質土、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土多く混じる。下層の灰及び ϕ 5-10cmの㉒のブロック混じる。
 ㉒ におい褐色 (10YR 5/4) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-20mmと ϕ 5-10cmの礫を含む。
 ㉓ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土、しまりやや不良、1-2mmの砂粒多く含む。
 ㉔ 褐色 (7.5YR 4/4) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-5mmの砂粒多く含む。
 ㉕ 赤褐色 (5YR 4/6) 砂質土、しまり良、黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土混じる。多量の砂粒を含む。

E

W



- ① におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土と灰黄色 (2.5Y 7/2) 砂質土の混入土。
 ② 暗赤褐色 (5YR 3/6) 砂質土、しまり良、同様に、礫を含む。
 ③ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土、しまり良、と赤褐色 (5YR 4/6) 砂質土の混入土。
 (2.5-5cmの灰ネオリーブ (7.5Y 6/2) 砂質土、ブロック多く含む)。
 ④ 明赤褐色 (5YR 3/6) 砂質土、しまり良、 ϕ 5-15cmの礫多く含む。
 ⑤ ②と異なるが色調はやや明るい、礫を含む。
 ⑥ におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土と明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土の混入土、しまり良。
 ⑦ におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土と明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土の混入土、しまり良、 ϕ 1cm程度の灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土多く混じる。
 ⑧ 暗赤褐色 (5YR 3/6) 砂質土、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土混じる。
 ⑨ 赤褐色 (2.5Y 4/6) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-2mmの砂粒多く含む。

- ⑩ 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土、しまりやや不良、と明褐色 (5YR 5/6) 砂質土の混入土。
 灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土少量混じる。
 ⑪ 黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土と黄褐色 (5YR 6/1) 砂質土と明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土の混入土、しまり良、若干の礫を含む。
 ⑫ 灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土におい褐色 (7.5YR 5/4) 砂質土少量混じる。
 ⑬ におい暗褐色 (5YR 3/4) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-2mmの砂粒を含む。
 ⑭ 黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土、砂質の強い部分もあるが全体にしまり良。
 ⑮ 明褐色 (5YR 5/6) 砂質土、しまり良、灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土少量含む。
 ϕ 1-5mmの礫多く含む。
 ⑯ 赤褐色 (5YR 4/6) 砂質土と明褐色 (5YR 5/6) 砂質土と灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土の混入土。

- ⑰ 褐色 (5YR 6/8) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-5mmの礫を含む。灰ネオリーブ色 (7.5Y 6/2) 砂質土少量混じる。
 ⑱ におい褐色 (10YR 5/4) 砂質土、しまり良、 ϕ 1-5mmの礫を含む。
 ⑲ 灰褐色 (2.5Y 7/4) 砂質土、粘性有。
 ⑳ 灰褐色 (5Y 8/4) 砂質土。
 ㉑ 明赤褐色 (10YR 7/6) 砂質土、粘性有。
 ㉒ におい褐色 (2.5Y 6/4) 砂質土、粘性有。
 ㉓ 灰褐色 (2.5Y 7/3) 砂質土。
 ㉔ 暗赤褐色 (2.5Y 5/2) 砂質土、粘性有。
 ㉕ 黄褐色 (2.5Y 5/6) 砂質土。
 ㉖ 黄褐色 (5Y 8/6) 砂質土。

- ㉗ 灰褐色 (2.5Y 7/4) 砂質土。
 ㉘ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土と赤褐色 (5YR 4/6) 砂質土の混入土。
 ㉙ 褐色 (10YR 1/1) 灰泥(濃いトーン部分)。
 ㉚ ②と同じだが石が多く含まれる(濃いトーン部分)。
 ㉛ 灰ネオリーブ色 (5Y 5/2) 砂質土、しまり良、礫はほとんど含まず。
 ㉜ 灰褐色 (2.5Y 6/6) 砂質土。
 ㉝ 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土、地土。

第3図 寛弘寺1号墳丘断面図

調査を開始する時点では、墳丘は草木に覆われており、ほとんど立ち入れない状態であった。そのため、機械掘削に先立って墳丘の草木を伐採したところ、墳丘の周囲に後世の石列が巡っていることが明らかになった。

この石列は10～30cm程度の川原石を数段積み上げたものである。墳丘中位と裾という上下2段に巡らされていた。裾を巡る石列は現代の境界水路の肩に積まれていた。この水路は墳丘東裾に沿って南から北に向かい、墳丘北東隅で西北西に向きを変えて谷筋に流れ込むよう掘られたものである。一方、墳丘中位の石列は墳丘を全周していたようである。この石列の時期や用途は不明であるが、水路肩の石積みと非常によく似ていることから、周辺が果樹園とされた段階に、墳丘の崩落防止に積まれたのではないかと思われる。幸いにも、石を積む際の墳丘への掘り込みは深くなかったため、墳丘は大きな改変を免れていた。

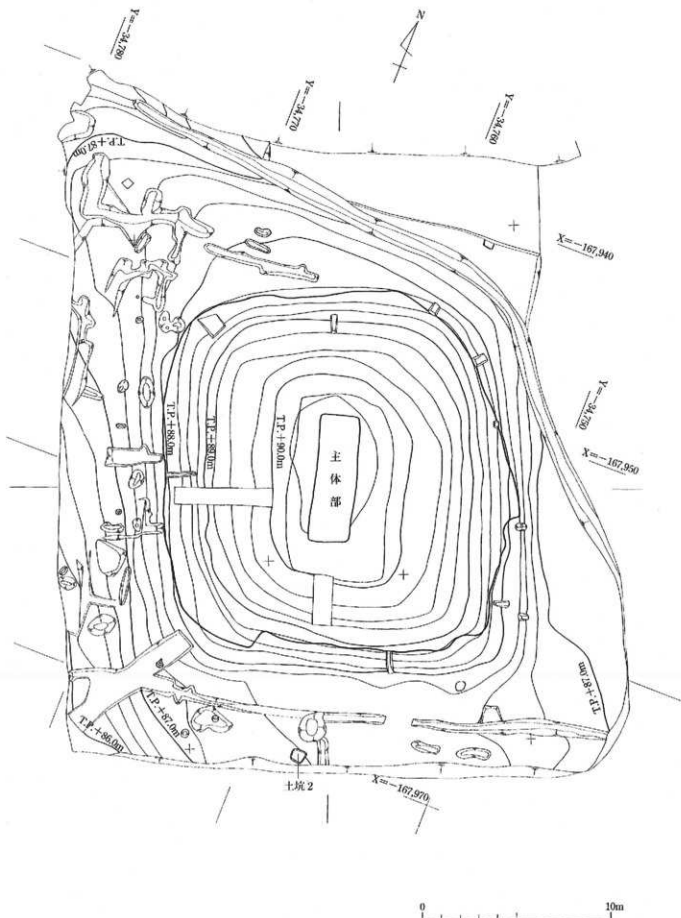
墳丘を略測した後、表土を重機で掘削した。墳丘に生えていた草木とその根は機械掘削時に大半を取り除くことができた。また先述した石列も同時にはずした。そして機械掘削を完了した後、人力により墳丘を精査し、表土を完全に取り除いた。この段階で、墳丘の正確な形や規模が明らかになった(第4図)。

本墳は昭和62年度のツギノキ山支群の調査時に、基礎的な確認調査が行われている。墳丘の周囲に11本のトレンチを設定し、墳形と規模の把握が試みられた¹⁾。その結果、本墳は方墳であること、規模は一辺17m程度であると考えられた。今回の調査で、本墳は方墳であることを再確認するとともに、墳丘盛土の規模が南北18.5m、東西18mであることが明らかになった。ただ墳丘の東側南半部と南側は地山面を削りだして裾部を整え、その上に盛土をしている。この地山面を削りだした裾部部分を含めると、墳丘全体の規模は南北20m、東西20mとなる。

墳丘盛土の基底面のレベルはT.P.+89.0m前後である。また地山面を削りだした南側裾部のレベルはT.P.+87.8～89.0mである。墳頂部は大きく削平されているが、現状では墳頂部平坦面はほぼ長方形で、南北約10m、東西約5.5m、レベルはT.P.+90.2～90.4mである。なお墳丘の高さは墳丘盛土基底面から墳頂部最高所まで約1.3m、最も低い墳丘南側裾部から墳頂部最高所までは約2.6mである。

2) 外部施設の確認

埴輪列の有無 墳丘頂部は削平と攪乱が著しく、埴輪列の有無はまったく確認できなかった。円筒埴輪片は出土してはいるが、数点しかなく、しかも表上から出土しているにすぎない。円筒埴輪は表面が摩滅しているものの、その特徴から5世紀代に位置づけられると考える。後述するように本墳の時期は5世紀前葉と考えており、時期的には大きな齟齬はきたさない。しかし、出土量が少なすぎるとと思われる。本墳周辺の調査でも、本墳に埴輪列があったことを裏付けるほどの埴輪は出土していないことから、本墳には本来埴輪列はなかったと推測する。本墳の属する東部丘陵において、本墳に先行する29号墳、ならびにほぼ同時期と見られる27号墳は、いずれも埴輪列がないこともその傍証となろう。



第4图 宽弘寺1号墳平面图

周溝の有無 本墳では、これまで本格的な調査は行われていないものの、昭和61年度の調査は本墳北側隣接地で行われており、本墳墳丘北側裾にトレンチも入れられている²。また翌年の昭和62年度調査では先述したとおり、墳丘の周囲に11本のトレンチが設定・調査されている。両年度の調査概要報告では1号墳の周溝の有無について断定はしていないが、いくつかの知見が得られている。

昭和61年度調査では本墳に隣接する調査区南端部において、周溝の可能性あるかに思われる溝状遺構（溝1）が検出されている。調査区端であるため一部の検出にとどまっているが、総検出長は約15m、幅は2～3mあり、同調査区で検出した29号墓の周溝よりもやや規模は大きいと考えられる。しかも北東部で直角に屈曲しているが、屈曲している位置は1号墳の北東コーナーの延長線上にほぼ一致しており、あたかも墳丘裾を巡るかに見える。この溝1は本墳の北側墳丘裾から7m余り離れていて、そのままでは周溝とは見なしがたい。ただし墳丘の軸方向と溝1の方向が非常に近い上、墳丘が後世の改変を受けているかもしれないため、周溝である可能性も皆無とは言い切れなかった。

また昭和62年度の調査では墳丘北側裾に入れられたトレンチから断面U字形をした溝が検出されている。このトレンチは昭和61年度の調査でいったん設定・調査したものを再発掘したものが、昭和61年度の調査概要報告には断面U字形の溝については明確な記載がない。位置的な関係から現代の境界水路と判断されたためと考えられる。

したがって今年度の調査では溝1のつづきを確認すること、本墳に墳丘の崩落や改変の事実が認められるかどうかを検証すること、断面U字形の溝が現代境界水路かどうかを確認すること、の3点に主眼を置いた。

調査の結果、溝1のつづきは本調査区では検出できなかった。どうやら途中で途切れているようだ。また墳丘には大規模な崩落や改変を受けた痕跡は認められなかった。溝1の性格は不明なまま残っているものの、少なくとも本墳の周溝である可能性はなくなったと考えられる。また断面U字形の溝は、すでに埋没している境界水路を全掘し、位置関係を確認した結果、周溝ではなく、境界水路であったことを確認した。

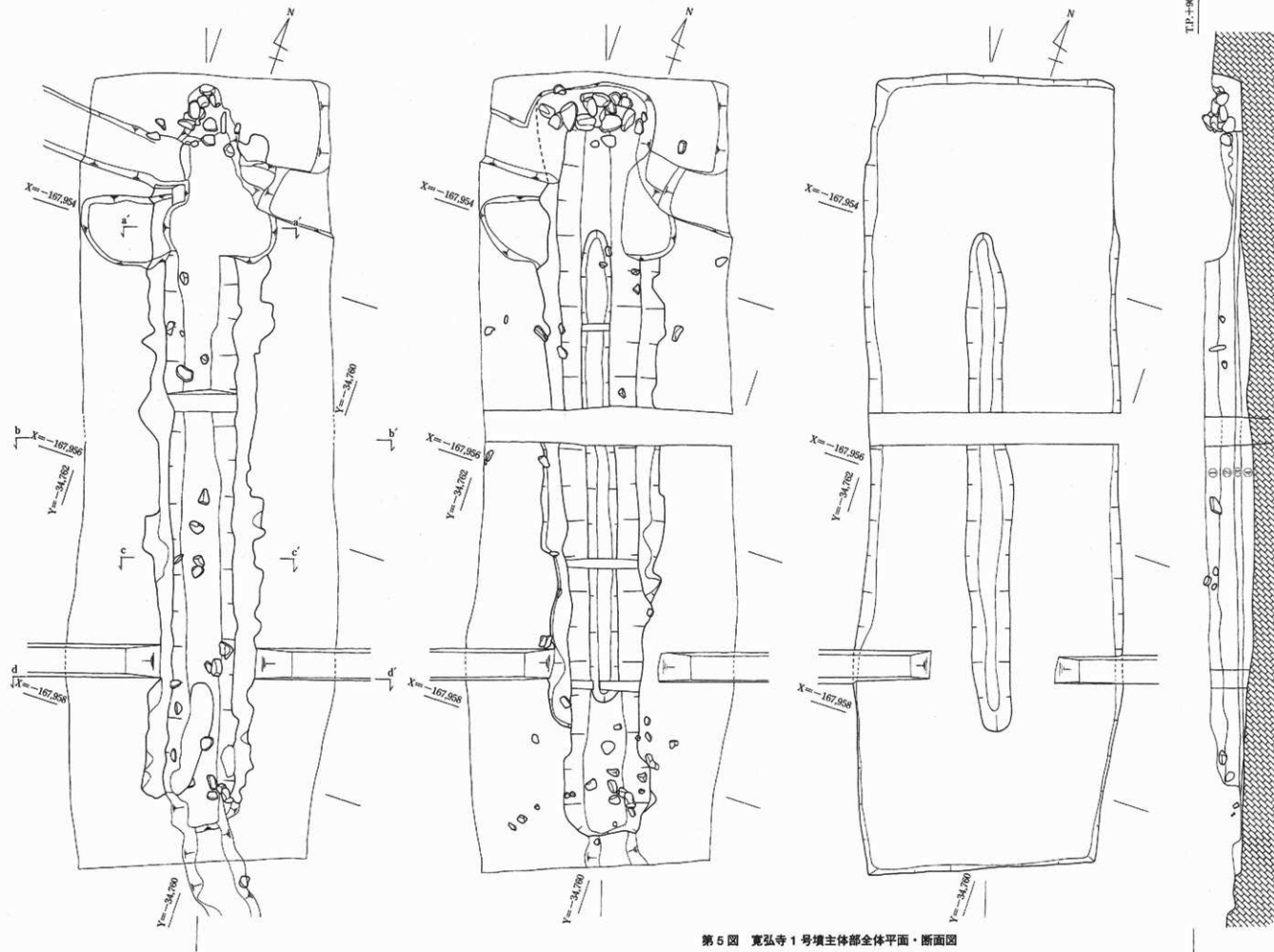
一方、今年度の調査でも東側墳丘裾において、検出長12m、幅0.7m～1.0m程度の窪みを検出したが、深さは最大5cm程度、輪郭も不明瞭で、やはり周溝とは考えられない。墳丘東側南半部および南側の裾は先述のとおり地山を削りだして整えていることから、この窪みも墳丘裾部削りだし時の痕跡であると考えられる。

以上の結果から、本墳には周溝が本来存在しないと考えられる。

(地材)

第3節 主体部の調査

墳頂部は削平されており主体部の上半部は失われていたが、かろうじて下半部は依存していた。本墳の主体部は割竹形木棺を納めた粘土槨である。主軸の方向は北に近く、N-18°-W（ただし



- ① 5YR 5/6 明赤褐色土 ①1-3mmの砂礫多く含む。しまり良、粘性あり。
 ② 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 砂粒を含むが礫ほとんど認められぬ。わずかにオリブがかった色調。しまり良。
- ① 7.5YR 6/8 明黄褐色土 5Y 6/6 オリブ粘土ブロック(2-3cm)が混じる。砂礫多く含む。しまりは良い。
 ② 5YR 6/6 褐色土 2.5Y 6/4 におい黄色の粘土ブロック混じる。砂礫多く含む。しまりは良い。
 ③ 5YR 5/8 明赤褐色土 しまり良。1-5mm程度の礫を多く含む。粘性は低い。
 ④ 5YR 5/6 明赤褐色土 2-3mmの礫を多く含む。しまりは良い。ブロック土。
 ⑤ 5YR 5/6 明赤褐色土 砂礫多く含む(3-7mm程度)。しまりは良い。
 ⑥ 7.5YR 5/6 明褐色土 砂礫混じり。堅くしまる。本層の崩壊する可能性有り。⑤に比べて粒子が細かくやや灰色がる。
 ⑦ 5YR 5/8 明褐色土(土) 2.5Y 6/6 明黄褐色(粘土部分) 明褐色土を含んだ粘質土しまりは良い。1-2mmの礫を多く含む。全体に粘性は低い。
 ⑧ 7.5YR 5/6 明褐色土 やや粘性あり。しまりは良い。1mm以下の砂粒を含む。
 ⑨ 2.5Y 6/3 におい黄色粘土 1-5mmの砂礫を多く含む。1-2cmのチャートの円礫を含む。あまり顆粒な粒ではない。填圧理土および主体部断面にプロック状に混じっている。
 ⑩ 5YR 5/8 明赤褐色土 しまりはやや不良。砂質が強い。1mm以下の砂粒を含む。植物の根の痕跡である可能性有り。
 ⑪ 5YR 5/8 明赤褐色土 5YR 6/8 オリブ色土 ①と同じ。
 ⑫ 7.5YR 5/4 におい褐色土 5cm以下の石灰・炭石を含む。上の粒子は非常に細かい。堅くしまる。
- ① 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 砂粒を含むが礫ほとんど認められぬ。わずかにオリブ色がかかった色調。しまり良。
 ② 7.5YR 5/6 明褐色土 1mm以下の砂粒を含む。全体に粒子細かい粘性もある。しまり良。
 ③ 2.5Y 6/3 におい黄色粘質土 1-5mmの砂礫を多く含む。②/2-3cm大のチャートの円礫を含む。
 ④ 7.5YR 5/6 明褐色土 1mm以下の砂粒含む。全体に粒子細かい粘性もある。しまり良。
 ⑤ 2.5Y 6/3 におい黄色粘質土 1-5mmの砂礫を多く含む。②/2-3cm大のチャートの円礫を含む。
 ⑥ 7.5YR 6/8 明黄褐色土 5Y 6/6 オリブ色粘質土混じり。⑦と似るが⑥は非常に堅くしまり、色調は褐色が強い。砂礫多く含む。
 ⑦ 7.5YR 6/8 明黄褐色土 5Y 6/6 オリブ粘土ブロックが混じる。⑥/1-10mm、②/2-10cm大の砂礫多く含む。堅くしまる。
- ① 5YR 5/8 明赤褐色土 ②/1-5mmの砂礫多く含む。砂粒も多く粘性低い。しまり良。
 ② 5YR 5/6 明赤褐色土 ②/1-3mmの砂礫多く含む。しまり良。①に対して粘性あり。③と区別できない部分があった。
 ③ 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 砂粒を含むが礫ほとんど認められぬ。わずかにオリブ色がかかった色調。しまり良。
 ④ 7.5YR 5/6 明褐色土 1mm以下の砂粒含む。全体に粒子細かい粘性もある。しまり良。
 ⑤ 7.5YR 5/6 明褐色土 1mm以下の砂粒含む。全体に粒子細かい粘性もある。しまり良。

第5図 寛弘寺1号墳主体部全体平面・断面図

Nは座標北)である。なお植樹のために掘ったと見られる穴は主体部にも重複しており、北側小口付近と南側小口付近が大きく攪乱されていた(第5図～第8図)。

墓壇 主体部を埋設するために墳頂部に掘られた墓壇の平面形は、ほぼ長方形である。規模は長さ6.7m、最大幅2.1m、検出面から底までの深さは0.25m程度であった。なお墓壇底のレベルはT.P.+90.1m前後である。埋土は現状で2層が確認できる。下層は7.5YR6/8明黄褐色土である。砂礫を多く含み、締まった土である。この土層の上面はT.P.+90.25～90.35mであり、若干の凹凸はあるものの、ほぼ水平に均されている。上層も7.5YR6/8明黄褐色土であるが、削平のために部分的にしか確認できなかった。下層に比べやや赤みが強い色調で、また下層よりもかたく締まることで区別できる。

なお、墓壇の埋土からはサヌカイトの小片が出土したのみである。

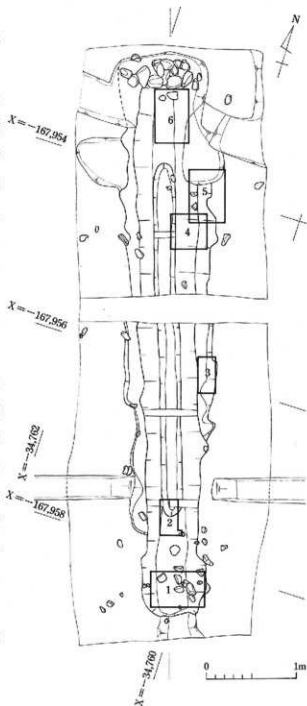
排水溝 墓壇底中央では、溝状遺構が検出されている。規模は長さ3.95m、幅0.25m、深さは中央付近が最も深く約10cm、南北両端部は次第に浅くなり墓壇底へとつながる。埋土は基本的には1層で、7.5YR5/6明褐色土である。排水施設としての機能は全くないと考えられるが、排水溝の形骸化したものとして捉えておきたい。

なおこの排水溝からは遺物はまったく出土しなかった。

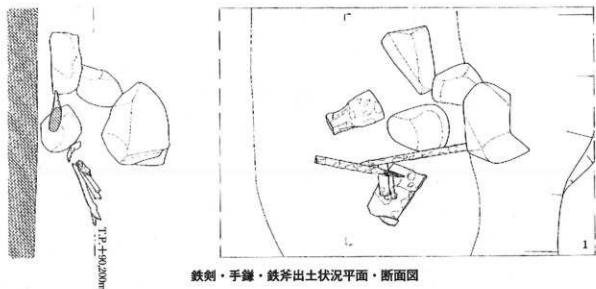
粘土床 割竹形木棺を設置するための粘土床が7.5YR5/8明褐色粘質土である。長さは5.5m、厚さは0.3～0.8cm程度である。木棺中央部分が厚く、南北両小口付近はやや薄い。細かい砂粒は含むが、礫はほとんど含まない精良な粘質土を使っている。粘土床底上面のレベルは北小口部でT.P.+90.18m、南小口部で90.10mである。わずかの差であるが、南から北に向かって平均的に高くなっている。

粘土床内には鉄剣が北側で1本、南側で1本の計2本が入れられていた。

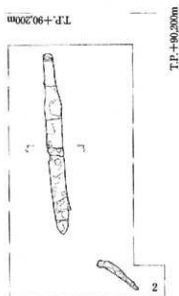
木棺 木棺の痕跡は認められなかったが、粘土床の形状から割竹形木棺であることは確実



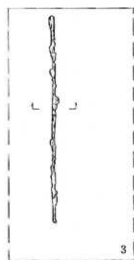
第6図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土位置図



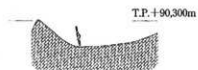
鉄剣・手鎌・鉄斧出土状況平面・断面図



鉄剣・蕨手刀子出土状況平面・断面図

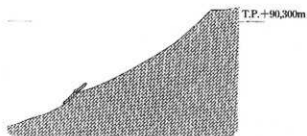
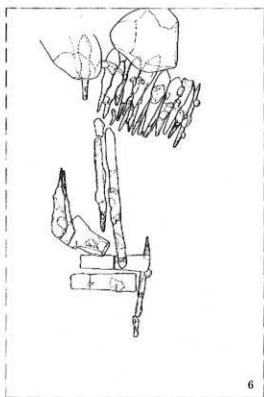
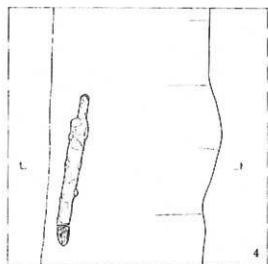


鉄剣出土状況平面・断面図



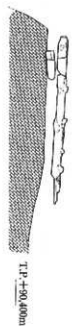
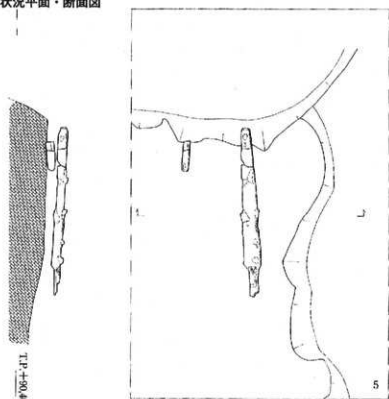
0 20cm

第7図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土状況細部(1)



鉄鎌・直刀鎌他出土状況平面図

鉄剣出土状況平面・断面図



T.P.+90,400m

鉄剣出土状況平面・断面図

0 20cm

第8図 寛弘寺1号墳主体部遺物出土状況細部(2)

である。また粘土床から木棺の規模を推定すると、長さは5.5m、直径は北側小口付近で0.6m、南側小口付近で0.5m程度と考えられる。

木棺内には北側小口付近に鉄鎌約30、鉄ヤリガンナ3、袋状鉄斧1、小型の鉄鋤先2が、南小口付近には鉄ヤリガンナ2、袋状鉄斧1、鉄鋤先1、小型の鉄鋤先2が副葬されていた。しかし上面からの攪乱坑がちょうどそれぞれの副葬品の部分にかかっており、特に南小口部分の副葬品は全く原位置を保っていない。攪乱土および表土からも若干の鉄製品が出土していることから、実際はもう少し多くの副葬品があったものと考えられる。また鉄製品以外の副葬品はなかったが、念のため粘土床内の土層である5YR5/8明赤褐色土と5YR5/6明赤褐色土はすべて持ち帰り、水洗した。結果として、若干の細かい鉄錆塊以外、まったく遺物は含まれていなかった。

なお木棺の直径の差や木棺内の副葬品の出土状況、粘土床のレベル差などから見て、被葬者の頭位は北であると考えられる。

小口の石積み 木棺の小口部分には直径10~20cm程度の石が積まれている。北側小口部の石積みは攪乱を逃れて残りが良かったが、南側小口部の石積みは攪乱により完全に壊されていた。石の種類はチャートが多く、付近の河川敷でごく一般に認められるものであって、特殊な石ではない。石を積むためのベースとして7.5YR6/8明黄褐色土が敷かれている。これは墓堀掘り方埋土と同色・同質の土だが、石敷きの部分は周囲と比較して土にしまりが弱く、断面観察では容易に区別できた。石積みの下底面のレベルは北側小口でT.P.+90.2m程度である。粘土床である7.5YR5/8明褐色粘質土のレベルより高い。木棺の小口部分のみを塞ぐように石が積まれていたことがわかる。

木棺両脇の粘質土 割竹形木棺の両脇には2.5Y6/3にぶい黄色粘質土が帯のように連なっている。長さは木棺の推定規模をやや凌ぐ5.7m、幅は一定しないが10~30cm、厚みは10cm前後である。断面形は特徴的で、内側は木棺に沿っているため厚く、緩やかなカーブを描いているが、外側はどの部分も例外なく薄くなっており、五角形に近い形をしている。おそらく割竹形木棺の身と蓋の合わせの部分の隙間を塞ぐために置かれているのだと思われる。またこの粘質土は木棺よりもやや長く、両小口側にはみ出しているが、小口を塞ぐ石積みの一部にかかっていることから、石積みを設置した後で、この粘質土を貼っているものと思われる。

この2.5Y6/3にぶい黄色粘質土を除去すると2箇所鉄剣を検出した。いずれも木棺東側の粘質土部分で、一本は中央やや南よりの部分で、二本を北側小口近くで検出している。特に北側の鉄剣は攪乱のため一本は切っ先が欠け、すぐ横にもう一本あるが、これは茎の部分しか残っていない。

主体部構築の手順 主体部構築の手順は以下の様に復元される。(1) まず墳丘に墓堀を掘る。(2) 墓堀掘り方中ほどまで7.5YR6/8明黄褐色土を入れる。(3) 墓堀内に入れた7.5YR6/8明黄褐色土に粘土床をつくるための掘り方を掘る。その下底部に排水溝を設置する。(4) 粘土床を貼る。その際、鉄剣を粘土床内に入れる。(5) 割竹形木棺を安置する。被葬者の埋葬。鉄製武器・農工

具の副葬。(6) 小口部分を塞ぐ石積みを入れるため、改めて小口部分の外側を掘る。(7) 7.5YR 6/8明黄褐色土を入れた後、その上に石を積む。(8) 木棺の身と蓋の合わせ部分付近の7.5YR6/8明黄褐色土を浅く溝状に掘る。(9) 木棺の身と蓋の合わせ部分に2.5Y6/3にぶい黄色粘質土を貼る。その際、鉄剣を粘質土に入れる。(10) 木棺を覆うように7.5YR6/8明黄褐色土を入れる。構築終了、という手順が復元される。

以上、墳丘部と主体部の調査を通じてみた、本墳の時期については副葬品の鉄鏃の型式から5世紀初頭から前葉と考えられる。東部丘陵では丘陵北端部に位置する27号墳とともに、隣接する29号墳に次いで築造された古墳ということになる。これまで5世紀後葉に位置づけられていた本墳の時期がおおよそ半世紀遡ることがわかったことで、東部丘陵における古墳群の展開が一層明らかになったと考える。

(地村)

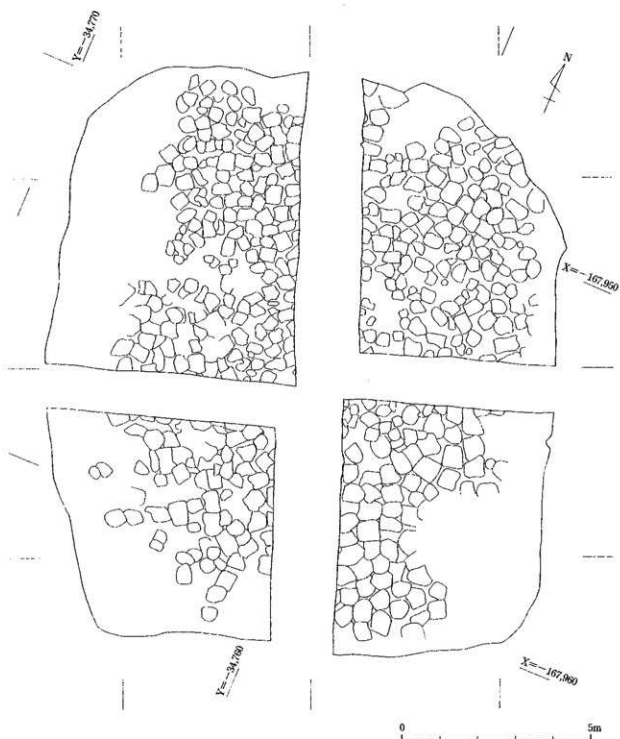
第4節 墳丘盛土の調査

1) 墳丘の構築

本墳の墳丘構築土の堆積状況から構築過程を以下の三工程に分けて考えてみた。

古墳を造営するにあたって、まず選地された後、伐採・除草も含めた何らかの旧表土の整地が行われたと考えられる [第一工程]。本墳では前述した炭灰を含む第Ⅱ群の炭屑存在から、意図的に野焼きした可能性がある。意図的としたのはこの炭灰が墳丘の全範囲に及ぶが、墳丘外にはあまり及んでおらず、一定範囲に収まることから意図的に野焼きされたと考えられるからである。しかし、野焼き後、削り出しによる整地作業は認められない。第Ⅱ群で検出した石も被火しており、削り出されたとすればこれらの石も取り除かれたであろう。この付近からは出土遺物もないので、これらの石がなんらかの儀礼的行為の結果と考えられる根拠はなさそうである。次に、野焼きした後、墳丘範囲を定め、炭灰で覆われた表土を一辺30～50cm、厚さ10～20 cm程度を一単位として墳丘範囲内の低所に移す [第二工程] (第9図)。その際、炭灰が下に土が上になっていることから、炭灰を含むブロック状のものが一単位として敷き詰められたように見える。しかし、本墳の場合、基盤となる地面が西に傾斜しているため、盛土を行う前にこの東西の高低差を解消しなければならなかったため、古墳築造盛土の範囲外にも及んだ被火した旧表土も掘り取り、それを振り分けて平坦面を確保したようである。そのため西側ではブロック状のものが二・三段に盛り上げられる結果となった。この野焼き後の旧表土の積み上げについて、断面と平面で見た場合、比較的まとまった一定のブロック単位として捉えられた。それがこの段階での盛土作業の特徴であろう。以上の盛土の後、その上に墳丘周辺を下方に削って四方を整え、その際削られた地山土も含む土は墳丘となる中心部から外側へ盛り上げられた [第三工程]。この地山土には、層序のところで触れた灰オリブ色土が1.0～5.0cmほどの塊となって、全体的に疎らではあるが、混入している。削った地山土に、土質の異なる土を意図的に混ぜて盛土としていた可能性も考えられる。

(進藤)

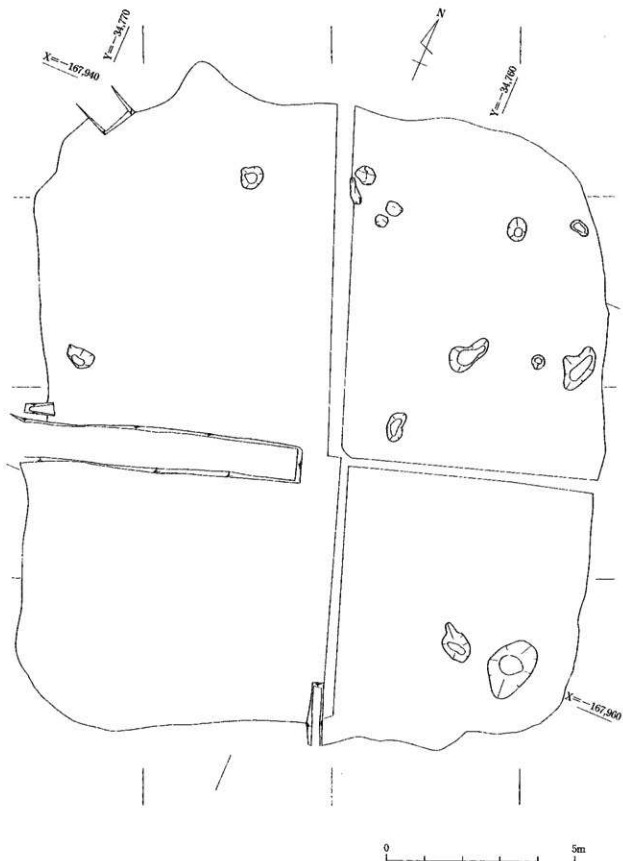


第9図 寛弘寺1号墳墳丘盛土基底面上の炭灰混じりブロック平面図

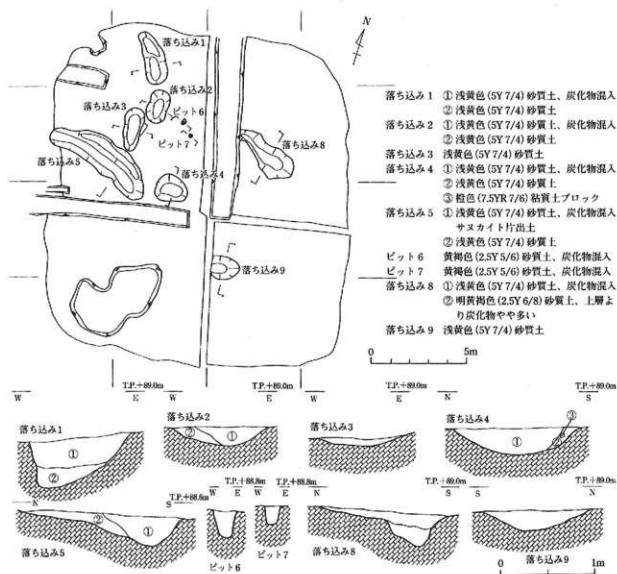
2) 墳丘盛土下の検出遺構

層序の説明の第Ⅱ群十層を除去した面では不定形な落ち込みが東側から北側にかけて認められた(第10図)。これらの落ち込みから遺物は出土していない。層序の説明にあるように、古墳の盛土を行う前のⅡ地表面であり、落ち込みは立木の根の痕かも知れない。

北側中央端ではこの面で自然石4個がまとまって検出された。小さいものは径30cm前後、大きいものは径50~60cmで、30×70cmの長手の石もある。周辺にはこの石を埋めるような掘り込みの痕跡はなく、単に地表面に置かれた状態である。石の表面には旧地表面上の炭灰層の堆積時にと



第10図 寛弘寺1号墳墳丘盛土下の検出遺構(1)



第11図 寛弘寺1号墳填丘盛土下の検出遺構 (2)

どめられたと思われる炭化の変色痕がみられた。それは層厚とほぼ同じ部分が黒変していることから明らかである。それ以外にこれらの石と結びつく特徴的な証跡は認められなかった。

さらにその旧地表面を掘り下げる、つまり層序に挙げた堆積層のうち、従来の調査に照らして縄文時代の包含層に相当すると考えられる第5層を取り除くと、最終地山面に達する。この面で西北部を中心に不定型な落ち込みが検出された (第11図)。溝状となって西北にのびる形で捉えられる落ち込み5・8に加えて、断続的な形として捉えられる落ち込み1・2・3も含め、西北に傾斜する地山の形成に伴った自然地形によるものと考えられる。落ち込み5の第1層ではサヌカイト片が出土した。またこれらの落ち込み群と区別される径20~30cm、深さ15~20cmの円形ピットが2箇所検出された。そのうちピット7でもサヌカイト小片が出土している。落ち込みとピット以外では、この第5層から、A区で3点、B区~C区ではそれぞれ1点、計5点が出土し、またこの包含層上の最初の盛土となる炭層にも1点混在していた。これらのピットや落ち込みの性格については明らかではないが、堆積層に炭がわずかに混在するという共通した特徴が認められる。

浅黄色砂質土（基本層序の第57層）は1986年に本墳の北に接して調査された29号墳の調査の際、その下層で観察された包含層と似ている。そしてその包含層を取り除いた、今回と連続すると思われる地山面では縄文時代の落とし穴とともに不定形の土坑が多数が検出されている。調査者によると、縄文時代のサヌカイト製石器（無茎式石鎌）と未製品がこれらの土坑から出土したが、土器は全く出土しなかった。寛弘寺遺跡全体をみても縄文時代の石鎌など狩猟具と考えられる遺物は出土するのに、土器の出土を見ないので、調査者は当時の猟場の痕跡だろうと指摘している³。

今回の不定形落ち込みも状況はよく似ている。違う点を敢えて挙げるとすると、二次的に加工・調整された痕跡もないサヌカイトの小片だけが出土していることである。前回の調査で注意された状況に関連づけると、これらのサヌカイト片は少なくとも製品を得る過程でその場に残され、場所によって廃棄された不要な破片の内容に違いが生じた結果ではないかと考えられる。

（拵本）

註1 『寛弘寺遺跡発掘調査概要・V』1987年8月

註2 『寛弘寺遺跡発掘調査概要・IV』1987年3月

註3 註1に同じ。

第4章 出土鉄製品の観察

粘土塚内の北・南小口部分で鉄鏃、および農工具類が、まとまって出土した。これらは鉄鏃、手鎌、直方鎌、袋状斧において、ほぼ同一規格のものが一対みられたことが大きな特徴である。なお、前二者が重なるか並置して出土したのに対し、袋状斧は北と南小口部分から1点ずつ出土したことも興味深い。他に鉄剣あるいは鉄槍が、粘土塚内あるいは粘土に埋め込まれた状況で出土している。すべての寸法が、異なっており、同一規格のものがない。

なお、分析は行っていないが、肉眼観察あるいはエックス線写真によって鍛造か鑄造かがわかるものは記載した。

鉄剣（第12図1～7） 鉄剣は、5本が出土している。ただし、鉄槍の可能性もあるが形態からは判断できない。長柄の痕跡や石突き等、槍と断定できる状況が確認できていないことから、暫定的に鉄剣として報告する。全長と形態に差はあるものの、いずれも断面は薄いレンズ状で、錆は形成しないことが特徴である。また、エックス線撮影によっても目釘孔は確認できない。木質の残りは悪いが、2～4の刃部に縦方向の木質が残存しており、鞘に入れた状態で副葬したことがわかる。1、5、6は不明。なお、布痕等は認められない。いずれも鍛造品。

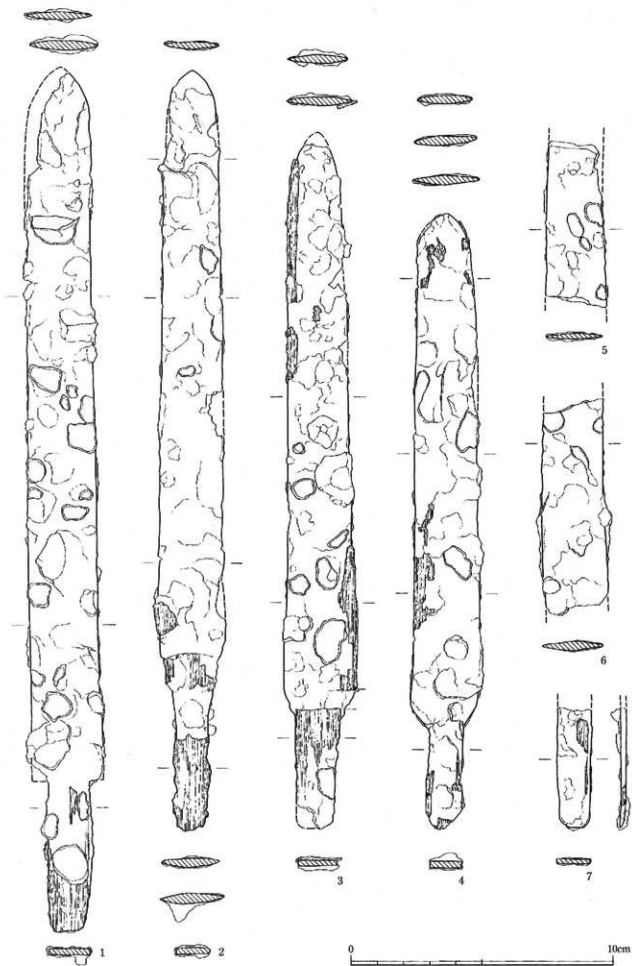
1は、粘土塚中央部の東側粘土内に切先を南に向け、埋め込まれた状況で出土した。先端部と関部が欠損する。残存長は32.5cmで、復元すれば0.2～0.3cm長くなる。刃部幅は先端に近いほど狭く2.4～2.7cm。厚みは、良好に残存しており0.3～0.35cm。茎部長は5.7cmで、茎尻へ狭くなる。関部は欠損しているが、直角近くに屈曲するようである。茎部のみ縦方向の木質が残る。

2は、粘土床内南方で切先を南に向けて出土した。刃部の一部が欠損するのみ。全長は28.7cm、刃部長22.2cmで、刃部幅は先端に近いほど狭く2.0～2.5cmである。厚みは、刃部中程から関部にかけて残存しており0.4cm。茎部長は6.5cm。関部の左は屈曲するが、右は欠損か。茎部に縦方向の木質が残り、やや湾曲する。刃部にもわずかに縦方向の木質が残存している。

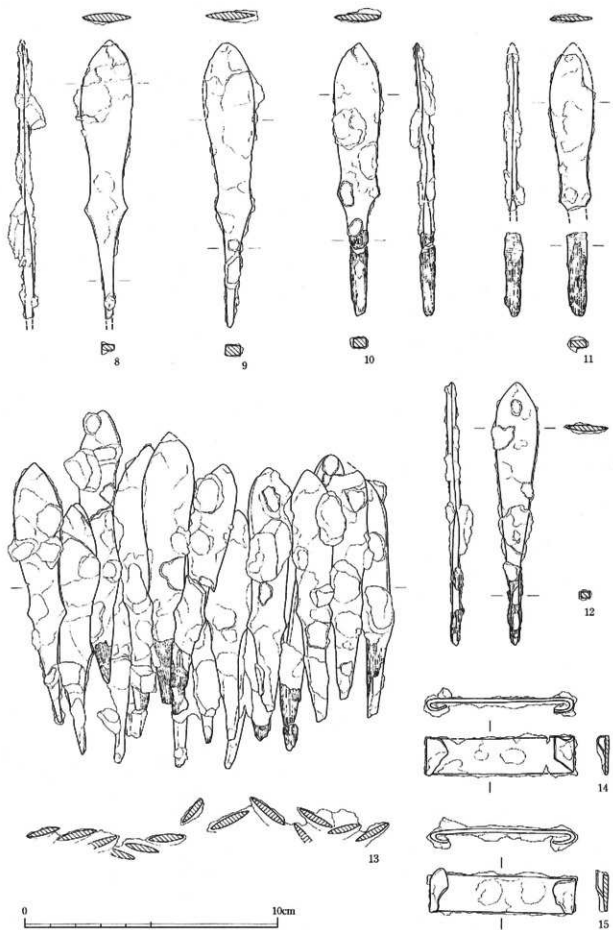
3は、粘土塚北方の東側被覆粘土内に切先を北に向け、埋め込まれた状況で出土した。先端部、刃部と茎尻の一部が欠損する。残存長は25.8cmで、復元すれば0.5cm程度長くなる。刃部幅は先端に近いほど狭く2.0～2.7cm。関付近で急激に幅広く、薄くなる。厚みは、錆による膨れで不正確ながら0.3cm程度。茎部長は4.5cm。関部は斜行する形態である。体部、および茎部に縦方向の木質が残るが、両者の間には0.5cm幅の空白部分が認められる。

4は、粘土塚内北方で切先を南に向けて出土した。刃部の一部が欠損するのみ。全長は23.2cm、刃部長18.6cmで、刃部幅は先端に近いほど狭く2.0～2.5cmである。厚みは0.3～0.4cm。関部は直線的に斜行するもので、茎部との区別は明確である。茎部長は3.8cmで平行してのび、端部は丸く終わる。茎部と刃部に縦方向の木質が残存する。

5～7は一個体とする確証はない。5は墳頂部、6は攪乱2、7は粘土塚北方の東側被覆粘土内に切



第12图 宽弘寺1号墳主体部出土鉄製品 (1)



第13図 寛弘寺1号墳主体部出土鉄製品(2)

先部を北に向け、原位置を保ち埋め込まれた状況で出土した。5・6は刃部の一部で、5は上方に急激に狭くなり、先端に近い。いずれも錆の膨れで本来の厚みは残さないが、極めて薄く0.3cm未満である。7は茎部で、形態は平行してのび、端部は丸く終わる。縦方向の木質が残存する。

鉄鎌（第13図8～13） 鉄鎌は、粘土槨内の北端小口部分で、先端を北にして1群（10～13）が出土した他、2点（8・9）がやや離れて先端を南に向け、重なった状況で出土した。鍛造品。1群13本を示したが、中央部で図示しえないものがあり、実際には17本が確認でき、10～12を合わせて20本で構成される。主体は関部が棘状に突出する柳葉形式（烏舌形鎌）であるが、群の東端にあった12のみ関部を持たない柳葉形式で、側縁が直線的である点が他と異なる。後者形式が他にあるのかは不明。いずれも断面の厚みは0.3～0.4cmの薄いレンズ状を呈し、鑄は形成しない。また、関部より先端にかけて刃部を形成し、それ以下には側面を形成する。

離れて出土した8・9は、他よりやや大型品である。完存する9は全長11.2cm、先端から関部まで6.5cmであるに対し、群のものは全長10.5cm前後、先端から関部まで6.0cm程度である。関部より以下には側面を形成する等、形態は同様である。

扱いの異なる鉄鎌の類似例は、石川を挟んで西側丘陵上に立地する前期古墳である富田林市宮林古墳にもみられる。そこでは南北方向の主体部が検出されており、「棺東端に12本の鉄鎌が一群をなして、鋒を南に向けて配列……また、1.4m北側に離れて3本の鉄鎌がほぼ重なった状況で、鋒を北西に向け遺存」²¹していた、と報告されている。

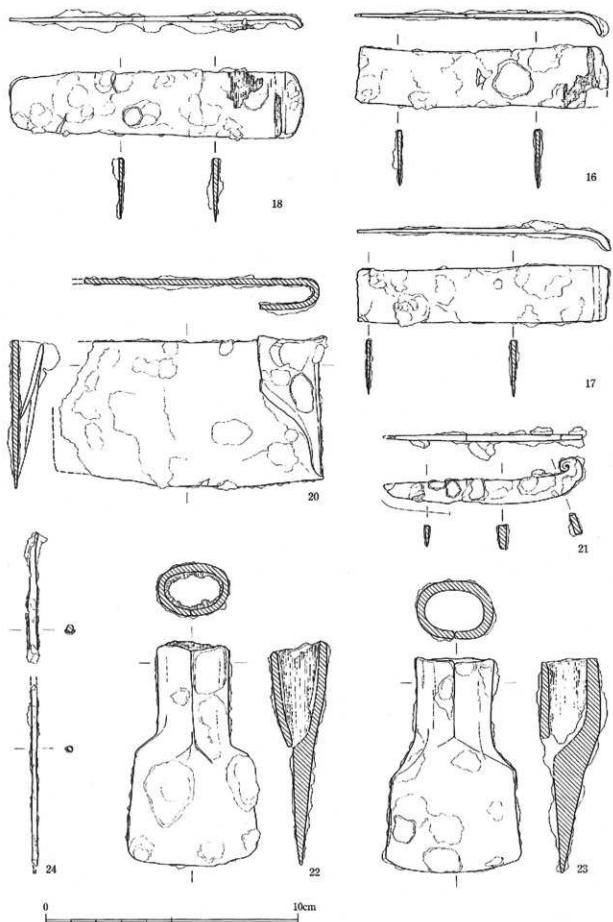
手鎌（第13図14・15） 粘土槨内の南端小口部分で、攪乱を被りながらも2点が重なった状況で出土した。本来の埋納状況を示すと考えられる。鍛造品。

両者は長さ7.0cm、幅1.4cm、厚み0.15cm程度の薄い鉄板の両端刃部側から三角形に切断除去した後に折り曲げ、14が全長5.9cm、15が5.8cmとほぼ同一規格に造っている。折り返しの刃部側は強くかきめており、また木柄を外した痕跡もないので、装着したまま埋納したと考えられるが、木質は残存しない。

直刃鎌（第14図16～18） 16・17は、粘土槨内北端小口部分で2cm弱のズレをもち、並列した状況で出土した。恐らくこのズレは装着したままの木柄を接して埋納したために生じたものである。なお刃部は北を向く。18は、攪乱5から出土した。鍛造品。

長方形の鉄板の一長辺を刃部、一短辺を折り曲げて着柄部としたもので、先端の形状から、直角に切断したもの（16・17）と、丸くなるもの（18）の二形態がある。なお、三者ともに先端部分に破損面は認められず、本来の形態を残している。

16・17は、全長10cm程度の鉄板を素材としたもので、基部幅は2.2～2.4cm、先端幅2.1～2.2cmで、両者の寸法にほとんど差がない同規格品である。厚みは先端にいくほど薄くなり、基部側で0.2cm弱、先端側で0.1cmである。基部の折り返しは鈍角で、木質の残存する16から木柄は直角に装着されたことがわかる。木柄幅は1.5cm程度。木質の残存は表面（平面図）のみで裏面には残らない。18とは装着方法が異なる可能性がある。



第14图 寛弘寺1号墳主体部出土鉄製品(3)

18は、全長11.8cmの隅丸長方形の鉄板を素材としたもので、基部幅2.6cmから先端幅1.9cmと狭くなる。厚みは0.2cmと厚く、先端部のみ0.1cmと薄くしており16・17に比べて重量感がある。基部の折り返しはやはり鈍角で、木質の残存から木柄は直角に装着されていたことがわかる。木柄幅は2.0cm程度。木質は裏面にも若干残存し、木柄に両面から挟み込んだ可能性がある。

鋸・鋸先（第14図20） 粘土椀内の南端小口部分で、手鎌の下で出土した。鍛造品。左折り返し部は欠損し、全形不明。残存長10.4cm、幅5.6～5.4cm、厚み0.2cm弱である。長方形の鉄板の一長辺を刃部とし、両端刃部側から三角形に切除去した後、折り曲げて木柄に着柄したもののだが、木質は残存しない。

蔵手刀子（第14図21） 棺床粘土内に切先を南東に向け、埋めこまれて出土した。鉄剣以外で唯一単独で出土したものである。鍛造品。先端部は欠損する。残存長7.8cm、柄部長4.6cm。先端を復元すれば8.0cm程度になる。一本の鉄素材から、刃部と柄部を明確に区別して造り出している。茎から緩やかに斜行して刃部に至ることを表現し、また、背部側の刃部と柄部境には極めて微妙な段を表現して区別した造りの細かいものである。木質は付着せず、鉄柄のままであったと考えられる。

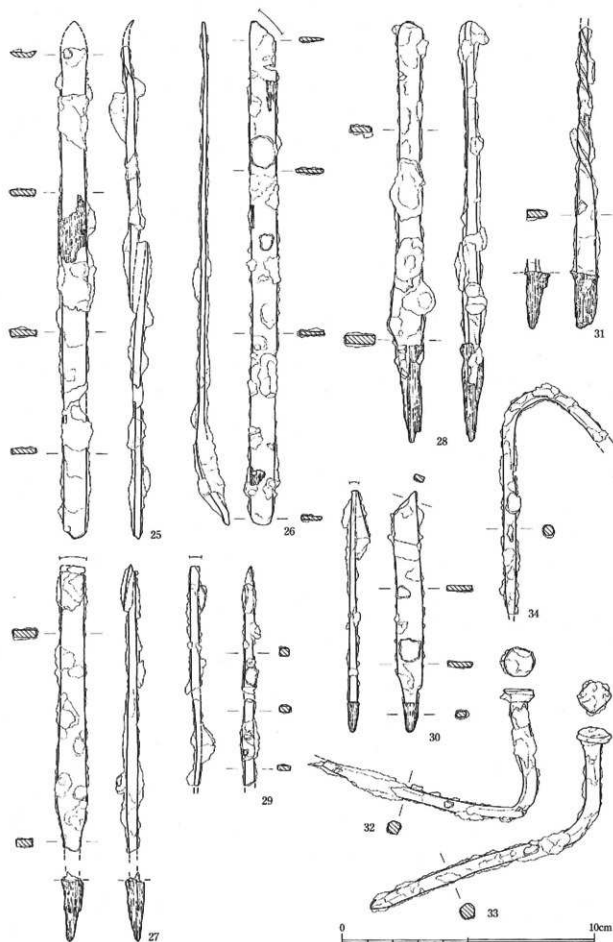
鉄斧（第14図22・23） 粘土椀内の北端小口部分で22が、南端小口部分で23が出土した。いずれも両刃を有する有肩斧である。鍛造品。

22は全長8.6cm、刃部幅5.1cm、袋部は2.8×2.0cmの楕円形、23は全長8.4cm、刃部幅5.3cm、袋部3.0×2.2cmの楕円形である。いずれも丁寧に折り返して袋部を造る。22の刃部右1/3程度は、研ぎ減りの可能性がある。袋部内に木質が残存する。23が若干厚い造りで重量感のある以外、両者は極めて類似した法量、形態を示す。

棒状鉄器（第14図24） 攪乱2出土。エックス線写真で層状剥離が確認でき、鍛造品であることがわかる。断面円形の棒状品。図面の上部部、中部、下部部ともに欠損しており、本来の形状、法量は不明である。上部部は若干湾曲しており、縦方向の木質が付着している。中程以下には木質は付着しない。直径は上～中部が0.3cm、下部で0.2cm強に細くなる。木柄に装着した錐の可能性が想定できる。

ヤリガンナ（第15図25） 粘土椀内の北端小口部分で出土した。直線的な体部と先端部に柳葉形の刃部を形成するヤリガンナである。実測図は残存する木質を示すために裏面を図示した。鍛造品。先端部を欠損しており、残存長19.3cm、幅0.9～1.0cm、厚み0.2cm程度である。刃部は体部よりやや広くなっており、素材の先端を叩き延ばして造り出す。側縁には面を有し、基部は山形に終わらせる。なお、側面図中程の段差は錆の膨れで生じたもの。体部裏面（平面図）と両側縁に縦方向の木質が付着しており、体部表面には及ばない。表面には有機質の残存はみられない。木質の残りが良好でないため詳細は不明ながら、三重県石山古墳の滑石製品に見られるように、「凹」形の木柄に装着しそれぞれに紐で巻いて固定した、と考えられる。

ノミ状鉄器（第15図26～31） ノミ状鉄器として一括したが、同一形態のものがなく、す



第15図 寛弘寺1号墳主体部出土鉄製品(4)

べてが別機能を有したと考えられる。すべてが鍛造品である。

26は、粘土椀内の南端小口部分で出土した。直刀状の形態に先端部に鋭い刃部を形成する。全長19.9cm、幅0.9～1.0cm、厚み0.15cm程度で、先端から基部まで均一的である。先端は斜方向に切断し、その部分に表裏面から研磨して鋭い直刃両刃を形成している。基部は丸く終わる。側縁には面を有する。なお、側面図では基部側がヤリガナのような屈曲を示すが、これは錆による膨れで生じた偶然のもので、本来は直線であることがよみとれる。基部付近と先端から2.3cmの部分に縦方向の木質が表裏面に付着しており、木柄に装着されていたと考えられる。

27は、粘土椀内の南端小口部分で出土した。直線的な体部と先端に平行刃を有する突ノミ。先端部は錆の膨れによる破損が著しいが、かろうじて両刃が残存している。基部は折損するものの接点に近い。全長13.6cm程度ながら、幅と厚みは一律ではなく強度を考慮した造りになっている。すなわち、幅は先端(0.9cm)から関部(1.2cm)へ広くなり、基部端に向かって再度狭くなる。また、厚みも先端(0.2cm)は薄く、関部(0.45cm)で最大にしている。木質は関部からやや下がった基部のみで、体部には付着しない。

28は、粘土椀内の北端小口部分で先端を北に向けて出土した。直線的な体部を有するノミと考えられる。全体が残存するものの、先端部の錆の膨れが著しく、刃部の形態は残存しない。27に同じく平行刃を有する突ノミか、あるいは丸ノミと考えられる。片刃か両刃かの区別もできない。27よりも重量感がある以外は、形態および造りは類似する。全長16.5cmで、やはり27と同様に幅と厚みは一律ではない。幅は先端(0.8cm)から関部(1.2cm)へ広くなり、基部端に向かって狭くなる。厚みは先端(0.3cm)は薄く、関部(0.5cm)で最大になる。木質は関部から0.7cm下がった基部のみに付着する。

29は、攪乱5から出土した。ほぼ直線的な体部を有するノミと考えられる。欠損しており、本来の形態は不明である。先端部も一部が欠損する。両刃。全長8.3cm以上で、先端部側の断面は0.3cm四方の正方形で基部側では長方形になるようである。

30は、攪乱5から出土した。直刀状の形態に背側先端部に刃部を形成する、細部加工に適した突きノミと考えられる。全長9.4cm、幅1.0cm弱、厚み0.15cm程度で先端から基部まで均一的である。先端は斜方向に切断し、背側先端部の幅0.2cm弱が刃部と理解する。なお先端は錆の膨れによって大きく変形する。基部は上方(平面図右側)は鋭く、下方は緩やかに抉って形成する。基部末端に木質が付着するのみで、強度は少ない。

特異な形態であり、確実な類似例は知らないが、京都府園部岸ヶ前2号墳¹⁾の埋葬施設1出土の鑿の破損品として報告されているものを候補としたい。

なお、幅と厚みが25・26と類似しており、三者は規格的な鉄素材を切断、叩き延ばし、研磨のみによって作成した可能性がある。また26と30は先端を合わせれば一線となり、同一素材を切断した可能性もある。

31は、粘土椀内の北端小口部分で先端を南に向けて出土した。1本の棒状素材を捻ったもので

あるが、先端が欠損するため種類は不明。錐の可能性が高い。基部から先端へ移行するほど幅狭く、薄くなる。基部で0.4×0.8cm、先端で0.2×0.4cm。

釘(第15図32～34) 3点が攪乱から出土している。体部、頭部のいずれにも層状の錆が生じており、鍛造品である。頭部の層状錆は横方向に生じており、棒状素材の一端を叩き延ばし、折り返して鍛接し、側縁に敲打を加えて形成したことがわかる。先端の欠損する32は残存長13.5cm、完存する33は全長12.9cm、頭部と先端の欠損する34は残存長13.0cmである。いずれも上部1/3程度の部分で折れ曲がる。断面形態は円形に近く、混入品と考えられる。(山田)

註1) 富川林市教育委員会『中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要』1985・3

註2) 佛教大学校地調査委員会『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』2001・3。122の鑿であり、破損品として報告されている。実見していないので断定は避けたいが、写真図版62を見ても破損とするには不自然と思われる。なお、脱稿後に兵庫県行者塚古墳の西副葬品箱出土鉄器に類例のあることを知った。また、漁津知克氏(京都大学大学院)より岡山県金蔵山古墳にも類例のあるとの教示を得た。

第5章 寛弘寺1号墳の墳丘の構築

第1節 寛弘寺1号墳の盛土の特徴

1) 盛土の単位

墳丘盛土の単位について大きく二通りの盛り方が観察される。その第一は、一人一人が一回に運ぶことのできる土量のことで（本墳では第Ⅱ群の一辺30～50cm・厚さ10～20cm程度のブロック状のもの）、これを最小盛土単位として捉えることが出来る。この最小盛土単位を正確に把握するためにブロックの大きさを計測してみると、平面で合計472個のブロックを確認できた。しかし、計測できたのは372個である。そのほとんどが長方形を呈していたので長辺と、それに直行する短辺を計測した（第16図）。一部が欠けていたり三角形のものについては第16図のように長辺・短辺を計測した。これらのブロックは断面からも分かるようにレンズ状に堆積を示していた。ただし、今回の調査ではそれを平面で検出したため、それぞれの大きさにいくぶん差が生じている。また、重なり具合から一個体を二個体として捉えていたり、その反対として捉えた可能性も皆無と言えない。しかし、長辺35～50cm、短辺30～45cmの範囲に収まるブロックが多く、ある程度のまとまりがうかがわれる（表1）。平均値を求めると、長辺約44.0cm、短辺約35.4cmという結果が得られた。このことから最小盛土単位として長辺約44.0cm、短辺約35.4cm、厚さ10～20cm、体積約0.02m³が1ブロック、言い換えるとこれが一回の作業上量ではなかったかと思われる。

その第二は、第三工程の盛土単位のことで、第Ⅰ群の2～43と分層した堆積土である。第Ⅰ群は前述した通り、灰オリーブ色土（第3章第1節基本層序参照）を含んだ地山の土を主体としている。この工程の作業では地山の土と灰オリーブの土を混ぜ合わせて盛土に利用した可能性があり、さらに墳丘周辺の低所の地山の土を運び上げている状況が見られた。

2) 大阪府下の古墳の盛土の最小単位

このような墳丘基底面での盛土としてブロック状に単位を示す例として、府下では寛弘寺19号墳の幅約0.4m・厚さ約0.1m¹、百舌鳥大塚山古墳の一辺30cm・厚さ10cm・体積0.01m³、前塚古墳の幅30cm・厚さ10～15cm²、蔵塚古墳の50cm前後³、今城塚古墳の幅0.4m・厚さ0.1m前後⁴などが挙げられる。これらのブロックの大きさもほぼ本墳の大きさと差がなく、ここで想定した作業内容がこれらの古墳でも行われたと考えられる。また、墳丘基底面だけではなく墳丘全体にブロックが見られる辰神車塚古墳の径50cm、厚さ10cm、体積0.02m³、矢倉古墳の15×40cm（断面図より推定⁵）がある。これらも墳丘基底面での盛土の大きさと大差なく、本墳に限らず幅30～50cm、厚さ10～15cmの土塊が古墳における最小盛土単位と出来よう。

3) 土掘りと土運びに用いられた道具

次に古墳築造にあたってどのような道具が使用されたのか考えたい。大きく土掘り具と、墳丘に積み上げる運搬具がある。

土掘り道具には農具である鉄クワ・スキ、もしくは鉄製の刃先を取り付けたスコップ状のものなどが用いられたと思われる⁹。しかし、現在まで出土しているこれらの道具の刃の大きさは20cm程度のものである。本墳をはじめ、ブロックが崩れることなく丁寧に敷き詰められていることからこれらの道具を使って一度に幅30～50cm、厚さ10～15cmの最小盛土単位の土を掘り取ったとは考えにくいのではないだろうか。先に四角く縁切りして形を崩さないように掘り取り、そのまま運び敷き詰めるか、それを運搬具に入れた後、所定の所へと運んだ状況も考えられる。

ブロックの表面に籠と思われる痕がついていた例がある。福井県丸山塚の白色粘土塊に籠目痕跡が見出されたことから粘土塊を籠のようなものに入れて運搬した可能性が指摘されている⁹。これと考え合わせて、最小盛土単位の運搬作業に好適な道具の一つとしては例えば箕状のものを挙げることができよう¹⁰。最近まで使用されていた箕状の運搬具については報告がある¹¹。それは最近のものを資料としているが、すでに唐古・鍵遺跡から箕状の木製品が出土しており^{12,13}、弥生時代の例えばクワやスキといった基本的な農具が中世、近世のそれらと形状が似ていることから、箕も形状的に現代と大差ないと思われ、参考資料とすることは可能だろう。これらについてもいわゆる長刃、短刃（元から先までが長刃に、先の幅が短刃になる事が多い）と厚さ（深さ）を求めると65.5×56.6cm、深さ16.9cmとなって、みたところこれは本墳の…単位の44×35.4cmとかけ離れているように思える。しかし、前述した通り本墳のブロックはレンズ状を呈しており、平面的に検出したことによって大きさに差違がある事を考慮しなければならない。本墳のブロックの計測では50～70cmの大きさのブロックも検出されているので、実際に用いられた箕状の運搬具は65.5×56.6cm前後のものと考えられる。むしろ、実際の箕の大きさより、平面的に捉えられた大きさの方が小さく、実際の箕の大きさの範囲内に平面的に捉えられるブロックの大きさが収まるので、矛盾はない。ただし、本来の箕の用途を考えるとそれは穀類の脱穀・調製に用いる選別のための用具とされているが、簡便な搬送用具として、砂利の運搬などにも使われている¹⁴。

以上述べた運搬具は、前述したようにさほど崩れがなく、比較的まとまった状態で検出されていることから最小盛土単位に適したものと考えた。それでは効率的に一度に大量に土を削り取り運んだ道具はどうか。大量に削り出し、墳丘上に運び込んだ運搬具としてモッコのようなものが想定できる。本墳の第三工程では最小盛土単位が明確には捉えられなかった。しかしモッコのようなもので土を運び積み上げていったのではないかと考えられる。モッコについても、箕と同様に大きさを計測した¹⁵。結果、縦縄、横縄それぞれの平均は69.6cm、61.6cmという数値が得られた。しかしこの土量に匹敵する単位を捉えられてはいないので、この数値はあくまで参考程度にとどめておきたい。

第2節 野焼きと旧地表面の整形

1) 寛弘寺古墳群に見られる野焼きの類例

これまでの寛弘寺古墳群の中で確認されている古墳は92基にも及ぶが、後世の削平により墳丘

が良好に残っていない古墳も多い。その中で本墳を除いて野焼き、または山焼きされたと報告されているものは3基だけである。まずその3基について見ていきたい。

17号墳¹⁶ 東部丘陵尾根中央部に位置する、周溝を含めた墳丘規模が、直径約30mを測る造り出し付きの円墳である。周溝出土の須恵器から5世紀後葉頃に築造されたと考えられる。「墳丘の構造方法を復元してみると、まず山焼きが行われている。築造面の土層は、一様に約5cmの層厚の黒褐色砂質土である。これは、その直下の黄褐色砂質土が火を受けて変色したものだと思われ、同質の土層である。この二層の関係は盛土中にもブロック状に見受けられる。」とある。

19号墳¹⁷ 東部丘陵尾根頂部に位置する、一辺約15mの方墳である。周溝出土の遺物により5世紀末葉頃に築造されたと考えられる。「まず山焼きが行われており、築造面は層厚約5cmの黒色土で、その下層は明黄褐色砂質土となる。これら二層の組み合わせが盛土中に見られるのであるが、17号墳ではそれらが疎であるのに対して本古墳では盛土の最下段はほぼこの層のみで形成されている。これは、周溝部の最上層のみを、最初に盛土として使用したためであろう。この層は、幅約0.4m、厚さ0.1mのレンズ状の堆積を呈し、これが一回に運ばれた盛土の単位を示していると考えられる。」とあり、本墳と非常によく似た様子を示している。

22号墳¹⁸ 北部丘陵中央を南北に貫く東尾根の北端部に位置する。地形測量によると円墳と思われ、復元すると直径は20mとなり、周溝をもつ。遺物から築造時期は6世紀中頃と考えられる。「墳丘は、弥生時代の旧地表面を焼き払い整地した後、礫や粗砂を含む砂質土に粘土をブロック状に含む土を人工的に盛り上げて築造されている。」

以上の3基から古墳築造前に旧表土を焼いていることが分かる。寛弘寺古墳群で確認できた野焼きは本墳を合わせて4基となった。このような野焼きの例は全国で報告されているが、この野焼きを含めた墳丘基底面の整地にどのようなものがあるか分類し、それぞれに当てはまる古墳を挙げるとともに本墳がどの位置を占めるのか見ていきたい。

2) 墳丘基底面をつくる為の整地作業¹⁹⁾

墳丘築造前に伐採・除草をふくめ、墳丘基盤面をつくり出す旧地表面の整地作業を考えるために大まかに整地作業過程を分類し、それぞれの類似例を取り挙げていく。

まず、整地作業を行うか行わないかによって二通りに分けられる。整地作業を行う場合には大きく盛土によるものと削り出しによるものがあるが、自然地形の高低差から一古墳の中でも高い方は削り出しに、低い方は盛土による整地作業や、前方後円墳では前方部と後円部で異なる整地作業を行っている場合もある。寛弘寺古墳群の中で見られたように整地作業前段階で旧表土を野焼きするか、一部盛土と重なるが炭灰層を敷くという例も合わせて挙げていきたい(表2)。

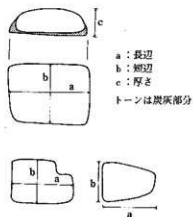
整地作業を行い(I)、盛土による整地(A)の例として本墳・寛弘寺1号墳(大阪府)・今城塚古墳後円部(大阪府)¹⁹⁾ 百舌鳥大塚山古墳前方部(大阪府)²⁰⁾・前塚古墳後円部(大阪府)²¹⁾・蔵塚古墳(大阪府)²²⁾が挙げられる。その中でも盛土による整地作業の前に野焼きをするか炭灰層を敷いているのは寛弘寺1号墳・今城塚古墳後円部である。その他に整地作業内容は明らかでないにせよ、

野焼きをするか炭灰層を敷いていることが報告されているもの（表2「地山整形」の下線で示したものは、寛弘17号墳(大阪府)²³・寛弘19号墳(大阪府)²⁴・寛弘22号墳(大阪府)²⁵・大塚古墳(大阪府)²⁶・弁天山C1号墳前方部(大阪府)²⁷・和泉向代3号墳(大阪府)²⁸・大枝山4・14・22号墳(京都府)²⁹・上人ヶ平方形墳(京都府)³⁰・物集女車塚古墳(京都府)³¹・五色塚古墳(兵庫県)³²・養久山15号墓(兵庫県)³³・鳥坂4号墳(兵庫県)³⁴・布坂4・5号墳(奈良県)³⁵・落合1・4号墳(三重県)³⁶・関野2号墳(富山県)³⁷・大萱場古墳(新潟県)³⁸・久米三成4号墳(岡山県)³⁹・古首志大谷1号墳(島根県)⁴⁰である。次に削り出しによる整地作業(B)の例として、妙徳寺山古墳後円部(山口県)⁴¹がある。本格的な盛土をおこなう前に炭層を敷くという作業は全国で行われていたと考えられる。また盛土、削り出し以外の整地作業には旧地表面を突き固めるという整地もあり、これは鶴崎天神台2号墳(千葉県)⁴²で認められた。ある程度平坦な旧地表面に直接盛土をする(Ⅱ)古墳も多いがその中であえて凹凸を残しその後、本格的な盛土で補う唐櫃山古墳(大阪府)⁴³のような例もある。

以上、列挙した古墳は弥生時代を含む古墳時代前期・中期・後期に認められ、墳形・規模についても全長300mを超す前方後円墳から直径が10mの円墳まで様々である。よって、整地作業は時期、墳形、規模に関係なく行われたと考えられる。

整地作業の目的は言うまでもなく本格的な盛土を行う前の墳丘基底面作りである。古墳の墳形や規模を念頭においた上で水平な基底面作りをおこなっている。樋口氏は整地作業の中でも旧表土を積み換えている作業を「表土積換法」と名づけ、表土を剥ぎ換えることにより洪積段丘上層の粘土層と墳丘盛土とを馴染ませ、基盤層と盛土の不整合による滑り崩落を防止する効果と、軟弱な旧表土を墳丘内部に丁寧に積換えることにより、盛土材に利用するかなり合理的な方法としている³³。また、土質工学的に見て軟弱な表土を取り除くことにより盛土の土圧に耐え得る墳丘基底面を設けることも指摘されている⁴⁴。またいったん旧地表面を焼き払うことは従来から除草目的とされてきた。しかし、この野焼きや炭灰層を敷くという作業を古墳築造過程における祭祀・儀礼と関連付ける見方もある⁴⁵。

兵庫県の養久山15号墳丘墓では墳丘全域の基底部に炭を含む黒灰色土層が分布していることから簡単な地山整形後、「清め」の意味を持つセレモニーとしての盛大な焚火を想定している。盛土の間層として断続的に炭の入る面の存在から、墳丘築造の途中にも軽く焚火をするか、最初の焚火の炭を用いている可能性も指摘されている⁴⁶。墳丘基底面ではないが野焼きされた可能性のある古墳がある。大阪府の岡古墳は一辺33mの二段築成の方墳であるが、上段と下段の境目には炭化物が多く含まれている層があり、土木工法的な目的以外にも墳丘築成過程に何らかの祭祀をとりおこなった可能性が指摘されている⁴⁷。奈良県の布坂4号墳では、旧地表面を焼いた後、埋葬施設の西側で3個の土坑を穿ち、その中で比較的長く焼いた跡を検出している。また、この木炭層の面から須恵器杯2点と壺1点も検出しており、先の焼土坑と合わせて墳丘構築過程での何らかの祭祀の可能性を指摘している⁴⁸。富山県の関野2号墳では地山上面に炭化物が薄く広く検出され、野焼きの可能性と、墳丘部地山直上から土師器壺細片が出土していることから、何らかの祭祀が



第16図 墳丘盛土基底面上炭灰混じりブロックの平面形状模式図

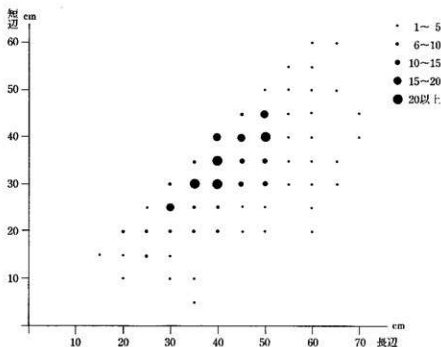


表1 墳丘盛土基底面上炭灰混じりブロックの平面規模の分布

おこなわれたらしい⁹⁾。これらの類例から墳丘基底面での野焼き後の何らかの祭祀が想定される。また、野焼き以外にも焼土坑とそれに伴う土器の検出により何らかの祭祀がおこなわれた可能性も全国で報告されている。しかし、炭灰層を即祭祀と結び付けるのは危険であろう。祭祀に関わる土器や遺物が出土しない限り整地作業の一環と区切りを付けることは難しい。

第3節 まとめ

寛弘寺古墳1号墳の墳丘構築の観察は以上のようなものである。特に本格的な盛土を行う前の野焼き例やその後の炭灰を含む土を積み換えるといった、一連の墳丘基盤面の整地作業を想定できた。この作業は墳丘基底面の整地の中でも丁寧な作業と考えられる。また、大規模な古墳だけでなく小規模の古墳にも丁寧な整地作業が行われていたといえる。これまでも寛弘寺古墳群の調査では17、19、22号で野焼きされた可能性が指摘されてきた。しかし、今回の調査で野焼き後の

古墳名	所在地	墳形	墳丘規模	時期	地山整形
寛弘寺1号墳	大阪府	方墳	約18×15m	5c	I-A
寛弘寺17号墳	大阪府	円墳	径25.5m	5c後半	I-B
寛弘寺19号墳	大阪府	方墳	一辺15m	5c末葉	I-B
寛弘寺22号墳	大阪府	円墳	径20m(復元)	6c中葉	I-B
百舌鳥大塚山古墳	大阪府	前方後円墳	全長168m	中期前半	I-A
今城塚古墳	大阪府	前方後円墳	全長348m	6c前半	I-A
船塚古墳	大阪府	帆立貝形古墳	全長94m	5c前半	I-A
蔵塚古墳	大阪府	前方後円墳	全長53.5m	6c代	I-A
大塚古墳	大阪府	円墳	径50m	5c初頭	I-B
弁天山C1号墳	大阪府	前方後円墳	全長約73m	4c末	I-B
和泉向代3号墳	大阪府	円墳	径12m	MT85~TK43 6c後半	I-B
海樺山古墳	大阪府	前方後円墳	全長約53m	川西編年のV期に近いIV期	II
大枝山4号墳	京都府	円墳	径19.0m	6c末~7c初頭	I-B
大枝山14号墳	京都府	円墳	径14.0m	7c第一~4期後半	I-B
大枝山22号墳	京都府	円墳	径20.0m	6c末~7c初頭	I-B
上人ヶ平方形墳	京都府	方形墳	(周溝10m前後)	5c中葉	I-B
物集女車塚古墳	京都府	前方後円墳	43~48m(推定)	約50年	I-B
五色塚古墳	兵庫県	前方後円墳	全長約194m	4c末~5c初め	I-B
養久山6号墳	兵庫県	(双方中形)	(約24m)	畿内第IV様式初頭(弥生後期)	I-B
鳥坂4号墳	兵庫県	円墳	径約10m	6c中葉まで古くない	I-B
布坂4号墳(第2次埋葬時)	奈良県	円墳	径13.5m	6c前半以前	I-B
布坂5号墳(第2次埋葬時)	奈良県	円墳	径11.0m	中期後半	I-B
久米二成4号墳	岡山県	前方後方墳	全長約35m	5世紀前半	I-B
妙徳寺山古墳	山口県	前方後方墳	全長約30m	4c後半~末	I-C
古曾志大谷1号墳	島根県	前方後方墳	全長約46m	中期末	I-R
落合1号墳	三重県	円墳	径約13m	MT15頃(6c前半)	I-B
落合4号墳	三重県	円墳	径約9m	TK23頃(5c末)	I-B
錦崎天神台2号墳	千葉県	円墳	径16.7m	6c前半	I-D
関野2号墳	富山県	円墳	径29.5m	5c初頭	I-B
大塚塚古墳	新潟県	円墳	径15m	7c初頭	I-B

表2 整地作業の観察される古墳一覧表

(地山整形の分類の下線は野焼きまたは炭灰層の存在を示す)

土の積み換えを断面と平面から捉えることが出来、盛土作業の実態がある程度具体的に指摘できた。

墳丘基底面の整地を分類し、その類似例を挙げたが、なぜ野焼きをしたり炭灰層を敷くのか、それは一つの整地作業に過ぎないのか、または祭祀と関係があるのかという問題までは指摘できなかった。これらを明らかにするためには今後資料の増加が待たれる。

(註1) 「地表面」とは古墳造営時前のある程度の草木が茂った状態、もしくはそれらの伐採後のことを指す。「整地作業」とは本格的な墳丘盛土をおこなう前の旧地表面に何らかの手を加え、墳丘基盤面を作り出すことである。古墳築造に関して最初に墳丘範囲内をならず程度の簡単な削り取りは行われていると思われるので、堅い地山面を出す程度の作業を「削り出し」と言うことにする。

(註2) 樋口吉文「古墳築造考」『堅田直先生古稀記念論文集』1997

百舌鳥大塚山古墳の古墳築造方法から盛土工法を分類し、その類例を挙げて築造工法の変遷まで述べられている。この盛土工法の中でもで整地作業として指摘された「表土積換法」を参考にまとめてみた。樋口氏の言う「表土積換法」とは、野焼きの有無を除くとI-Aに当たるものと思われる。(進藤)

<参考文献>

1. 上林史郎他『寛弘寺古墳群発掘調査概要・VII』大阪府教育委員会 1989
2. 樋口吉文「百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告」『堺市文化財報告第40集』1989
3. 宮崎康雄「前塚古墳」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・15』高槻市教育委員会 1991
4. (財)大阪府文化財調査研究センター「葦塚古墳」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』1998
5. 宮崎康雄「今城塚古墳の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会第40集』2000
6. 大船孝弘「昼神車塚古墳の調査と成果」高槻市教育委員会
7. 森田和伸「欠倉古墳」『古市遺跡群・IX』羽曳野市教育委員会 1988
8. 堅田直「古墳築造に用いられた土木用具」『季刊考古学』第3号
9. 斎藤忠「古墳の築造」『日本古墳の研究』吉川弘文館 1961
10. 秋山高志・北見 俊夫・松前 松夫・若尾 俊平共編『図録・農民生活史事典』柏書房 1979
11. 東京農業大学図書館『東京農業大学図書館標本室所蔵 古農機具類写真目録』1978
12. 田原本町教育委員会「S57年度 唐古・鍵遺跡 第13・14・15次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要』1983
13. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・田原本町教育委員会「平成8年度春季特別展 弥生の風景 唐古・鍵遺跡の発掘調査60年」1996
14. 『大百科事典』11 平凡社 1985
15. (10)に同じ
16. (1)に同じ
17. (1)に同じ
18. 藤川道子編『寛弘寺遺跡発掘調査概要・XV』大阪府教育委員会 1996
19. (5)に同じ
20. (8)に同じ
21. (3)に同じ
22. (5)に同じ
23. (1)に同じ
24. (1)に同じ

25. (18) に同じ
26. 柳本照男・服部聡志他『摂津豊中 大塚古墳』豊中市教育委員会 1987
27. 大阪府教育委員会 「弁天山古墳群の調査」『大阪府文化財調査報告第17輯』1967
28. 和泉丘陵内遺跡調査会 「和泉丘陵の古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書IV』1992
29. 上村和直他『大枝山古墳群』京都府埋蔵文化財研究所 1989
30. 小池寛「上人ヶ平遺跡の発掘調査—弥生・古墳時代の概観」『京都府埋蔵文化財情報』第27号
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
31. 向日市教育委員会「物集女車塚古墳保全整備事業報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第
40冊』1995
32. 喜多美宣他「史跡五色塚古墳(復元・整備事業概要)」神戸市教育委員会 1982
33. 近藤義郎他『養久山墳墓群』兵庫県揖保川町教育委員会 1985
34. 市村高規他「鳥坂古墳群」龍野市文化財調査報告V 兵庫県龍野市教育委員会 1984
35. 「桜井市外鎌山北麓古墳群」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第34冊 奈良県橿原考古
学研究所 1978
36. 伊藤祐偉他『近畿自動車道(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査第7 落合古墳群』三重 県埋
蔵文化財センター 1992
37. 宇野隆夫他『関野古墳群』富山大学人文学部考古研究室 1987
38. 駒形俊郎他『大萱場古墳』長岡市教育委員会 1985
39. 岡山県文化財保護協会「久米三成4号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(30)』1979
40. 足立克己・片羽野裕他 「古曾志遺跡発掘調査報告書」島根県教育委員会 1989
41. 山口県教育委員会「妙徳寺山古墳」『山口県埋蔵文化財調査報告書第134集』1991
42. 財団法人香取郡市文化財センター「鶴崎天神台遺跡」『(財)香取郡市文化財センター調査
報告書第26集』1994
43. 大阪府教育委員会 『唐櫃山古墳発掘調査概要』1982
44. 甘粕建「古墳の造営」『講座・日本技術の社会史 6. 土木』日本評論社 1984
45. 土生田 純之 「古墳構築過程における儀礼 一墳丘を中心として—」『古墳文化とその
伝統』勉誠社 1996
46. (33) に同じ
47. 藤井寺市教育委員会「岡古墳」『藤井寺市文化財報告第5集』1989
48. (35) に同じ
49. (38) に同じ

第6章 まとめ

寛弘寺第1号墳の時期

本墳の時期を現状で最も端的に示すものは、鉄鎌の型式で、柳葉形鉄鎌から系譜のたどれる、いわゆる鳥舌形鉄鎌である。本墳出土の鳥舌形鉄鎌の特徴は、大型品でありながらも体部に鍔が形成されずに断面形態はレンズ状を呈する「ペラペラ」のもので、鉄槍・鉄剣も同様の状況を呈している。胴部分が棘状に突出することも大きな特徴である。これらの状況は、小型・厚手で明確な鍔を形成する前期のものとは大きく異なるもので、古市古墳群では鞍塚古墳や珠金塚古墳南郷出土の鉄鎌に類似例が認められ、古墳時代中期前半に位置付けられるものである。

寛弘寺古墳群中では、北部丘陵で古墳時代前期中頃以降に古墳の造営が開始されるが、中期以降になれば本墳の立地する東部丘陵に築造の主体が移行することが知られる。本墳は第27号墳とともに、その初期の段階で築造されたものであることがわかる。

副葬品、および副葬方法の特徴 (第17図)

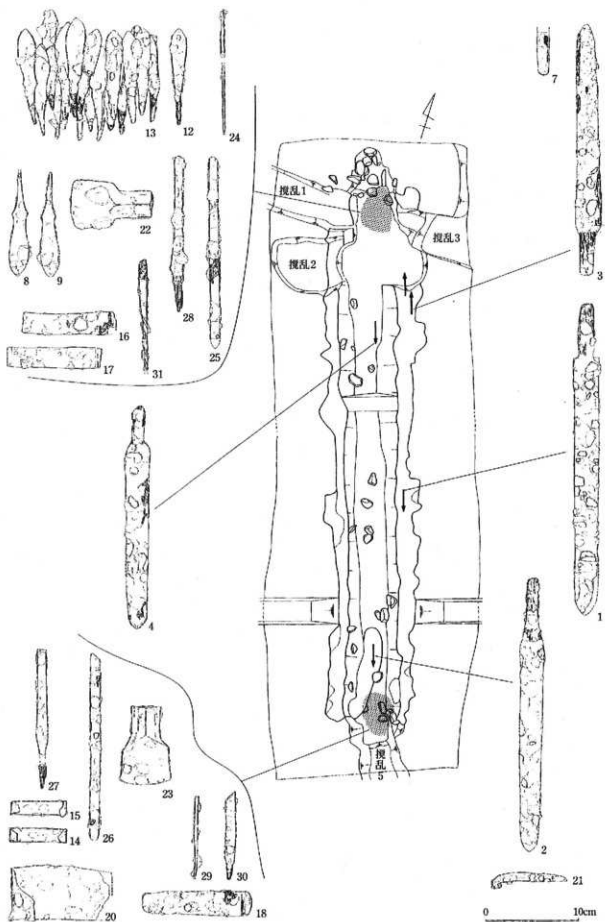
主体部の調査において出土した遺物は、棺内、棺外共に鉄製品のみである。これらは第4章でも報告したように、遺物の形態およびその副葬方法において極めて特徴的なあり方を示しており、一部重複するものの最後に列記してまとめておきたい。なお、釘3点については、いずれも攪乱からの出土であることと、断面形態から混入品として除外した。

遺物の内容、およびその順序は、以下のとおりである。

- 1) 出土鉄器には、埋葬に伴うあらゆる段階に埋納、あるいは副葬した鉄槍・鉄剣類と、粘土榔内の北・南小口部分でまとめて副葬した鉄鎌・農工具類の二者がある。
- 2) 1の前者の鉄槍・鉄剣類の場合、棺床形成時に埋め込んだもの(2と21の刀子)、棺を設置して副葬したもの(4)、被覆粘土と共に埋め込んだもの(1・3・7)の三段階がある。1は不明ながら、2・3・4は対部に木質が付着しており、基本的に鞘に入れた状況であったこともわかる。なお、棺床に埋め込んだ2のみ着柄が異なる。
- 3) 1の后者、粘土榔内の北・南小口部分でまとめて出土した鉄鎌・農工具類には、ほぼ同一規格のものが一対見られた。北小口では鉄鎌と直刃鎌が、南小口では手鎌がいずれも2点を重ねた状態で副葬していた。遺物報告で述べたように直刃鎌、手鎌にいたっては、同一規格で同一素材から製作された可能性が高い。鉄鎌は、若干大型の個体を鉄鎌束とはやや離れた所に、逆を向けて副葬していた。それらと異なるのが袋状鉄斧で、ほぼ同一規格の2点を北と南小口に1点ずつ副葬している。
- 4) 1の后者の内、工具類としてはノミ、ヤリガンナ、錐と考えられる鉄器、および農具類とされている鉄鋤・鋤先が出土しているが、いずれも別形態である。特にノミの形態の分化が著しいが、本段階からの特徴の一つと考えられる。

以上のように、2・3において葬送儀礼の順序、特徴が伺える。特に后者のありかたは特徴的であり、資料の増加によって評価されねばならない。

(山田)



第17図 鉄製品出土位置模式図

報 告 書 抄 録

ふりがな	かんこうじいちごうふん
書名	寛弘寺1号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2000-2
編著者名	地村邦夫、橋本哲、山田隆一、進藤智美
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんこうじいちごうふん 寛弘寺1号墳	みなみかわちん 南河内郡 かんなちよう 河南町 かんこうじ 寛弘寺	27382		34° 29' 40"	135° 36' 40"	2000年 2-3月、 6-7月	855	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寛弘寺1号墳	古墳	古墳時代	古墳	鉄製品 (鉄鍔、鉄剣、 直刃鎌、手鎌、 ヤリガンナ他)	

写真図版



図版 1

発掘前
南から



発掘前
西から



発掘後
南から



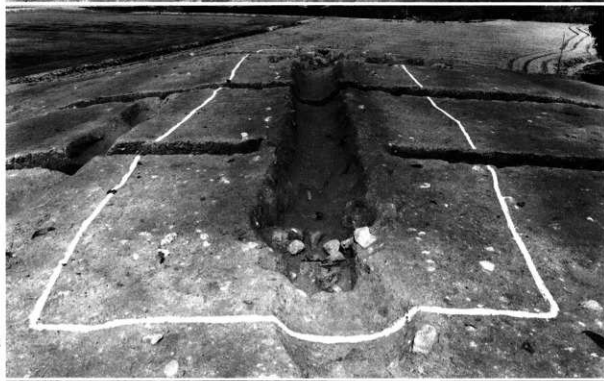
発掘後
西から



墳丘
全景
南より



主体部
全景
南より



主体部
全景
北西より





墓壇内
粘土床
雨より



墓壇内
排水溝
雨より

図版 4



木棺断面



木棺内北小口
鉄器出土状況
(上が南)



被覆粘土内
鉄剣1出土状況
(左が北)

図版 5
主体部遺物
出土状況 (1)

棺床粘土内
鉄槍 2、刀子 21
出土状況
(右が北)



被覆粘土内
鉄劍 3 出土状況
(左が北)



棺床粘土内
鉄槍 2 出土状況
(右が北)



木棺内
鉄劍 4 出土状況
(左が北)



図版 6
主体部遺物
出土状況 (2)

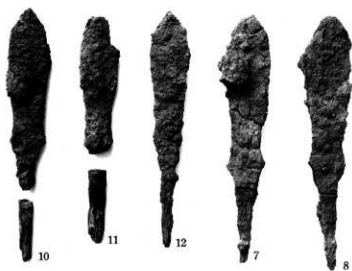
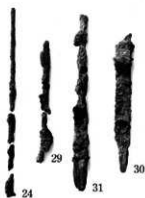


木箱内南小口
鉄器出土状況
(左が北)

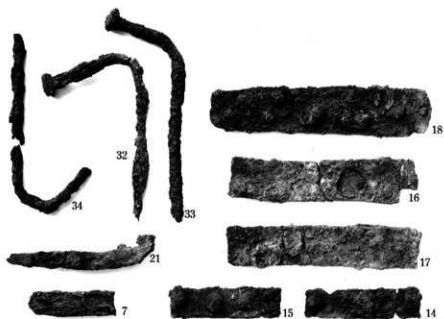
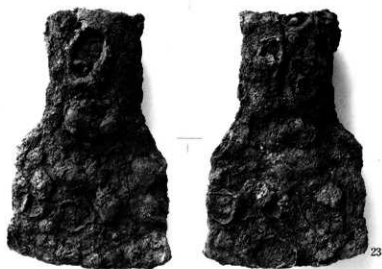
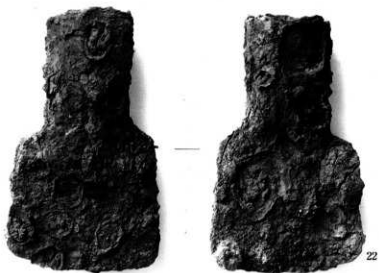


木箱内北小口
鉄器が頸を
出した
(上が南)

図版 7
出土鉄製品
(1)



図版 8
出土鉄製品 (2)



大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-2

寛弘寺 1号墳

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前 2丁目
TEL. 06-6941-0351

発行日 2001年 3月

印刷 サツキ印刷株式会社
TEL. 072-828-0171

